

K-447

神矢田遺跡

—第1次・第2次発掘調査報告—

昭和46年3月

山形県遊佐町教育委員会

神 矢 田 遺 跡

— 第 1 次 ・ 第 2 次 発 掘 調 査 報 告 —

昭 和 4 6 年 3 月

佐 藤 禎 宏

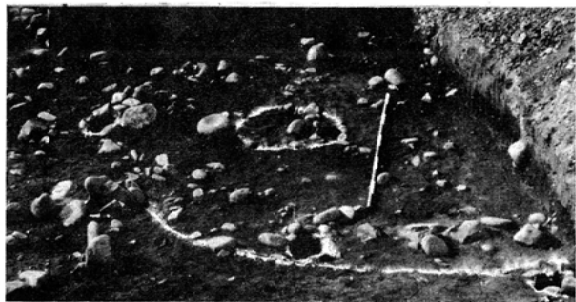
佐 藤 鎮 雄



図版1 神矢田遺跡の遠景（西南方より）



図版2 神矢田遺跡の近景（南方より）



図版3 第1トレンチ第2号住民址



図版4 第4トレンチ第3層a下部の状況

序

遊佐町教育長 菅原伝作

今回 神矢田遺跡の中間報告を提示することになったことは、誠に喜びに堪えない次第である。昭和四十三年から四十五年にかけて遊佐町畑地区区画整理事業施行に際し、数多くの土器の破片や鏃などを発見、村上孝之助氏の奨めや山大名譽教授柏倉亮吉氏の来町により、発掘の企画が進められ、俄かに神矢田は遺跡として脚光を浴びるに至った。町には村上氏を長とする調査団が作られ、又別に佐藤禎宏氏を指導者とする、酒田市立酒田中央高校社会研究部員約三十名の諸君と協力し、五月の連休を返上しての第一次発掘、夏休みの酷暑をおかしての第二次調査が行なわれた。

神矢田は、その名が表わす如く、鏃など石器が以前より発見されていたという。東は鳥海の山麓地帯のつきる処、高瀬川の清流に臨み、南は庄内平野を一望の下に見渡すことのできる景勝の地である。二～四千年の永きに亘る我々の先祖の住みよい生活の場として恰好の処であったであろう。神矢田の地は近世の歴史の中にも四十余戸の部落の存在が語り伝えられていることからその当時としては聚落を作るにはよい場所であったことが裏付けられる。

さきに、吹浦遺跡の発見があり、ひきつゞいての神矢田遺跡の発掘は、本遊佐町の開発の古さを語るものであり、これは、先人の生活状態を知る貴重な資料となるであろう。八月以降、佐藤禎宏氏の指導の下に中央高のクラブ員の諸君の手で、長期間の懸命な研究と努力により発掘物は分類整理され、十一月の町総合まつりにはその一部が展示され、更に佐藤氏による説明会が行われ、町民に大きな感銘を与えた。本報告が示す如く、この遺跡の解明が一応なされたが、更に、これを追究し立派なものにするために、四十六年度にはひきつゞき第三次調査をすることに決定した。このことは、やがて作られるであろう遊佐町史の貴重な第一頁を飾ることになるであろう。

茲に、この調査に総合的な御指導を賜りました柏倉先生、御援助下さった県教育委員会、クラブ員の先頭にたゝれ、万般をひきうけていたゞいた佐藤禎宏氏とクラブの諸君、応援にかけつけてくれた佐藤鎮雄氏、川崎利夫氏、大学生の方々、町の村上孝之助氏、更に後便宜を与えてくれた菅原三治郎氏はじめ町土地改良組合さん、御協力をいただいた畑の狩野、菅原両氏、上戸の松宮氏はじめ部落の方々、教委の諸氏に厚く感謝と御礼を申し上げ、第三次調査に大きな期待と成果を祈って止まない次第である。



図版5 第1トレンチ第1号炉址



図版6 注口土器の出土状態



図版7 小壺の出土状態



図版8
石鏃の出土状態



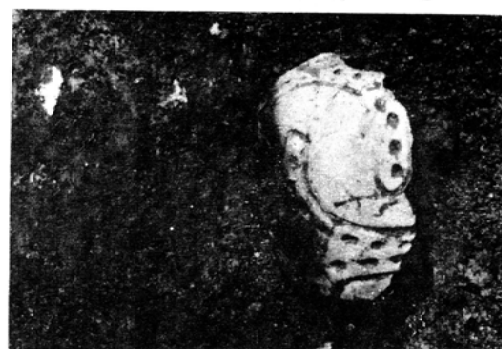
図版9
石鏃の出土状態



図版10
丸玉の出土状態



図版11
垂飾品の出土状態



図版12 有孔円柱形土製品と石鏃の出土状態



図版13 板状土偶と石鏃の出土状態

序

山形大学名誉教授 柏倉亮吉

秀峰、鳥海山のはるかな裾野が、南の方、庄内平野に、その高まりを没せんとするあたり、すぐれた一つの縄文遺跡がある。名を神矢田遺跡という。その名にふさわしく神矢の石鏃をおびただしく蔵する。この地中の宝物が、ゆくりなくもその姿を地上に現わしはじめたのは昭和45年2月のことであった。

現われ出るきっかけは、地区の圃場整備工事が開始されたことであった。工事の進捗にともない、遺跡は原形を失ないつつあるが、しかしその進行途上、幸いにも、遺跡はその価値を十分に世に顕わそうとしている。

この価値顕彰ができるのは思うに四つの要因がはたらいたことによる。要因の一は整備の工事が始まって以来、つねに注意を払い、遺物が出はじめると、直ちに町当局に訴えて調査の必要を力説した村上孝之助氏の考古学的な執念である。その二はこれを受けて、限りある予算の内、調査を実施し、時には吏員を動員して発掘に参加させ、更に報告書の刊行にまで漕ぎつけた町教育委員会の英断である。その三は調査の責任を負って発掘に当り、その結果を整理し、報告書にまとめあげた佐藤禎宏、佐藤鎮雄君ら若き学徒の精進である。その四は顧問佐藤禎宏君を助けて泥にまみれつつ調査隊の主軸となった酒田中央高校社会研究部の熱意である。これらのうちどれか一つが欠けても調査は実らなかつたことであろう。

この遺跡の年代は縄文文化期中期末からはじまり、後期、晩期に及ぶ。千年をはるかに越える長い間、ひとびとが住み続けた跡である。したがって縄文後期、晩期の殆んど全ての形式の土器片がここから採集されている。このような継続性をもつ遺跡は山形県内にはたぐい稀である。

報告書としてまとめられたものは、中間報告の性格であるが、さりながら筆者らの並み並みならぬ野心が深底に秘められているのを感じる。土器については出土品の形式分類を丹念に行ない、縄文中期末から晩期末にいたる序列づけを意図している。これはやがて困難な後、晩期の編年完成という仕事のための有力な資料を作ろうとするふくみをもっている。また石器については総計162に及ぶ多種多様の石鏃群を本遺跡の特徴として注目し、これを四型式に分類して石鏃による編年を志向している。今後この遺跡において或いは他の類似の遺跡において行なわれるであろう発掘調査が、この業績をふまえつつ、筆者らの期待を徐々に成就していくことを心から念願する。

序

遊佐町神矢田遺跡発掘調査団団長 村上孝之助

昭和45年の2月、町内高瀬地区畑地内の区画整理事業の工事中に「土器が出てきたので調べに来てほしい」旨の連絡を受けたと、教育委員会社会教育係より話があり、同行調査の要請があったので、現地を見たところ、北目川の南側斜面の一面約60アールにわたる地表面に、一面ブルドーザーに押し出された土器片が散布している状態であった。工事中の人達に話を聞いたところ石錐、石斧、石鏃等が出土し、すでに数人が所持しているとのことであった。

その後数回に亘り表面採取を続けたところ硬玉の小玉、ヒスイの工作片も採取することが出来たので、致道博物館の酒井忠一氏に連絡し、四月初めに来町をねがったところ、現場の状況からして是非発掘調査の必要がある旨助言されたのであった。しかし、川岸の一番大切な住居跡等が基盤までけづり取られ、土器が全面散布しているので、果して効果があるか否か討議を重ねた結果、教育委員会で発掘する旨決定したのである。その間に酒田中央高校の佐藤禎宏氏が来町、試掘されて、有望な遺跡であることを寄言されたので、一同調査準備に取掛ったのである。

古来庄内の西浜は、しばしば古記に石鏃の出土記録が見られますが、事実丸池の遺跡等は明治中頃石鏃の多土地として有名であり、又西山植林の恩人佐藤藤蔵翁は、西山の神矢道附近より集めた石鏃を、俵にて一俵を藩主に捧げたとされるし、翁の遺品の中にも石鏃多数をみることが出来るのである。

5月2日より4日間第1次調査を実施したが、特にこの時出土したスタンプ状土器について附言してみると、文様が拙宅に伝えられている、正徳元年に北目川より出土されたとしている石剣の把牛頭の文様と酷似しているので、研究したところ、石剣の出土地が神矢田であるとの判断をし、二百年来の疑問が氷解され、北目川の開墾も正徳年間と推測されることになった。

第2次調査は、8月6日より12日まで7日間の日程で実施された。その時の遺物は、硬玉の小玉、土偶（特に小さいもの2個）石製の装身具、浮石、石錘等、及び土玉、耳栓等、石皿、石棒、石鏃（200本近く）等が出土した。住居跡は、2戸を確認することができたが、復元可能な土器はすこぶる少なく残念ではあるが、これは要するに縄文後期より晩期にかけての永い間、度々の洪水で流されては住み、住んでは流された遺跡であるので、土器の出土がこのような状態であると考えられる。

前方には鮭の多産地である高瀬川を望み、野草、小動物も多く食糧に事欠か無い、暖い住みよい場所だったのであろう。

この調査にあたって、地元畑地区の絶大な協力をあおぎ、又本調査の主役として活動された酒田中央高校社会研究部の諸君、宿舎を提供された剣竜神社関係役員、又遠路最北までたびたび足を運んで下され指導していただいた柏倉教授及び県考古学界諸氏、発掘にあられた役場職員の諸君に深く感謝申し上げたい。

なお、今後の調査に特別の取り計らいを下された地元、土地改良区関係者に重ねて謝意を表し今後一層の各位のご協力を願う次第である。終りに本年3月28日に待望の砥石、石皿片の発見を追記いたし、調査の概略を記し序文とする。

目次

はしがき	1
I 遺跡の位置	2
II 表面採集の資料	3
III 発掘調査の経過と層位	8
IV 遺構	10
V 遺物	12
VI 神矢田遺跡の概要と問題点	41
あとがき	43

(題字は遊佐町町長佐藤政雄氏による)

図版・挿図目次

図版 1 神矢田遺跡の遠景(西南方より)	第 8 図 第 1 トレンチ第 1 号住居址	10
図版 2 神矢田遺跡の近景(南方より)	第 9 図 神矢田遺跡出土の土器の実測図	13
図版 3 第 1 トレンチ第 2 号住居址	第 10 図 神矢田遺跡出土の土器の拓影(1)	14
図版 4 第 4 トレンチ第 3 層 a 下部の状況 (北方より)	第 11 図 神矢田遺跡出土の土器の拓影(2)	15
図版 5 第 1 トレンチ第 1 号炉址	第 12 図 神矢田遺跡出土の土器の拓影(3)	16
図版 6 注口土器の出土状態	第 13 図 神矢田遺跡出土の土器の拓影(4)	17
図版 7 小壺の出土状態	第 14 図 神矢田遺跡出土の土器の拓影(5)	18
図版 8 石鏃の出土状態	第 15 図 神矢田遺跡第 1 次調査で出土した石鏃	30
図版 9 石鏃の出土状態	第 16 図 神矢田遺跡第 1 次調査で出土した石器	31
図版 10 丸玉の出土状態	第 17 図 神矢田遺跡第 2 次調査で出土した石鏃	32
図版 11 垂飾品の出土状態	第 18 図 神矢田遺跡第 2 次調査で出土した石器	33
図版 12 有孔円柱形土製品と石鏃の出土状態	第 19 図 神矢田遺跡で出土した石器	34
図版 13 板状土偶と石鏃の出土状態	第 20 図 神矢田遺跡第 1 トレンチ第 2 号住居 住居址出土の石皿	37
第 1 図 神矢田遺跡附近の地形図	第 21 図 神矢田遺跡出土の土偶(1)	38
第 2 図 神矢田遺跡表面採集の土器(1)	第 22 図 神矢田遺跡出土の土偶(2)	39
第 3 図 神矢田遺跡表面採集の土器(2)	第 23 図 神矢田遺跡出土の土製品	39
第 4 図 神矢田遺跡表面採集の石器	第 24 図 神矢田遺跡出土の石製装飾品	40
第 5 図 神矢田遺跡測量図		
第 6 図 第 3 トレンチ西壁層序		
第 7 図 第 4 トレンチ西壁層序		

はしがき

遊佐町の近郊では石鏃をカミヤインという。つまり神矢石であり、神矢田という地名は神矢石を多出する水田という意味になる。この水田は江戸時代の中頃に開かれたという。調査員の村上孝之助が所蔵する逸品の中に長さ20cm程、直径3cm程の黒々と煤けた石棒の断片があるが、これには正徳元年北目堰より採集されたと記されている。おそらくこの時期に水田が開墾され、遺跡を縦断する北目堰が切れ、石棒が出土したものと考えられる。正徳元年は西暦1711年にあたり、石器を人間の産物と考定した新井白石が執政にあたらんとする時期である。しかし「続日本後紀」や「日本三代実録」にあるように天より石鏃が雨降った出羽の国でこうした科学的な眼はまだ開かれていなかった。^(註1) 木内石亨の著「雲根志」には出羽出身の僧旭峯が石鏃を神軍のいくさの産物と語る件がある。^(註2) こうした意識が神矢石、神矢田の名称の起源に関わるものと思われる。

神矢田遺跡は中谷治宇二郎氏の「日本先史学序史」に記されている。^(註3) 「羽後飽海郡高瀬村当山神矢田」とあり、この書物の遺跡名は昭和10年頃までの文献に出現する地名を集成したものであるから、神矢田遺跡もよく知られた遺跡の一つと考えてよからう。ところがその後水田下に深く没して忘れ去られてきた。近年発行された「山形県遺跡地名表」にも「全国遺跡地図」にも神矢田遺跡の名は欠けている。^(註4) ^(註5)

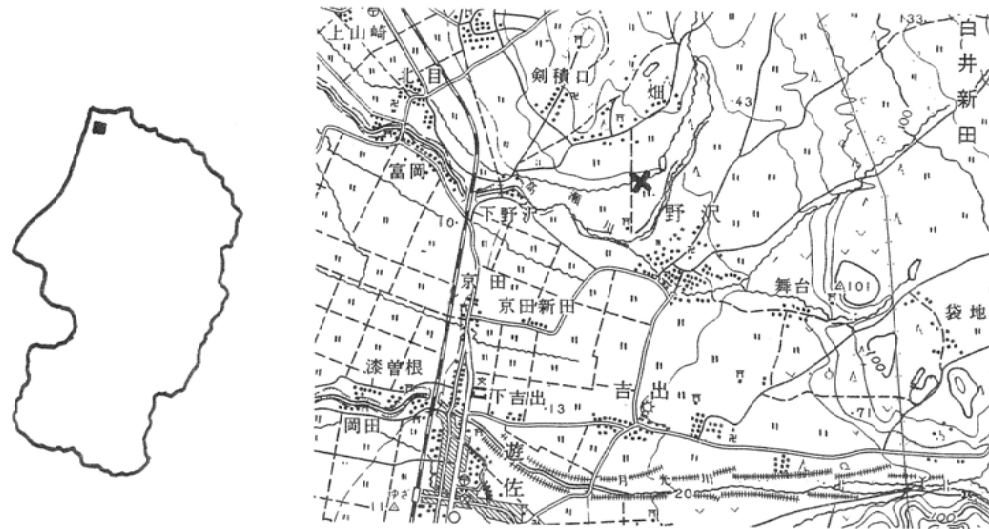
昭和45年2月、畑地区圃場整備事業によって遺跡の一部が破壊され、神矢田遺跡は再び姿を現わした。工事関係の心ある人々によって村上孝之助にその連絡があり、現地を實見した同氏は致道博物館の酒井忠一氏にその報を伝えた。同年4月3日佐藤禎宏と酒田中央高等学校社会研究部員が、4月6日には山形大学名誉教授柏倉亮吉と学生名和達朗と佐藤が現地を調査した。4月19日には佐藤と社会研究部員が小試掘をし、良好な包含層の残存を確認した。遺物の分布は200mにもおよぶ円形内に見られ、北目堰の南部の土壌が1m近くフルトーザによって削られ、平坦にする作業で土中の遺物が散乱したのであった。多数の石鏃が採集され、土器片によって縄文時代中期末、後期、晩期に属することが知られた。直ちに遊佐町教育委員会によって遺跡の工事は中断され、二次にわたる発掘調査が実施された。第1次調査は昭和45年5月2日から5日までの4日間、第2次調査は昭和45年8月6日から12日までの7日間である。なおこの報文の土器については佐藤禎雄がその他の部分は佐藤禎宏が執筆した。図表の作成には酒田中央高校社会研究部員が一部協力してくれた。

註1. 柏倉亮吉「研究史」『山形県史・考古資料』昭和44年3月
 註2. 八幡一郎『日本古代史の謎』昭和45年6月
 註3. 中谷治宇二郎『日本先史学序史』昭和10年12月
 註4. 柏倉亮吉編『山形県遺跡地名表』昭和38年3月
 註5. 文化財保護委員会『全国遺跡地図(山形県)』昭和41年3月

I 遺跡の位置

神矢田遺跡は山形県飽海郡遊佐町大字当山字北目にある(第1図)。山形県の北西端に近い遊佐町の北東約2.7kmの地点である。遺跡は鳥海山の南西山麓部が庄内平野に接しようとする裾野にあり、標高は9mである。南向きのゆるやかな傾斜面に位置する遺跡からは北東部に秀峰鳥海山が聳え、西には緑の松林があざやかな庄内砂丘、南には半月形をなす庄内平野が眺望できる。日本海海岸まではおよそ5.3kmである。遺跡の基盤をなす地質は「山形県地質図」によれば、安山岩質火山砕屑物であり、その上に沖積層が堆積している。遺跡の真中を北目堰が西流しており、0.5km程南を流れる高瀬川に合流する。この高瀬川は鳥海山に源を発し、ちょうど遺跡を迂回するようにして東側から南側へと方向を転じている。

遊佐町では93ヶ所の遺跡が確認されているが、それらは鳥海山の山麓部にほとんどが分布している。標高の低い平野部には歴史時代の遺跡が多く、眺望のきく小高い部分には古窯跡を除けば原始時代の遺跡が多い。すでに著名となった遺跡も多く、神矢田の北西8kmの地点には縄文時代晩期の青銅刀を出土した三崎山遺跡、北西5kmの地点には縄文時代前期の吹浦遺跡、東3kmの地点には旧石器時代の杉久保形ナイフを出土した臂曲遺跡、東4kmの地点には縄文時代早期の金俣遺跡、南東5kmの地点には石組の中より縄文時代晩期の遮光土偶を出土した杉沢遺跡などがある。このほかにも未発掘の遺跡は数多い。鳥海山の南西部山麓一帯は原始時代には極めて良好な居住地となったと考えられる。神矢田遺跡は縄文時代の後半にかなりの年数とかなりの規模をもって盛衰していたらしい。



第1図 神矢田遺跡附近の地形図(左)

- 註1 神保恵『山形県地質図』昭和35年3月
註2 柏倉亮吉編『山形県遺跡地名表』昭和38年3月
註3 柏倉亮吉「三崎山出土の青銅刀」(東北考古学2)昭和36年10月
註4 柏倉亮吉・江坂輝弥・酒井忠純・酒井忠一・加藤稔『山形県飽海郡吹浦遺跡調査報告』昭和30年3月
註5 柏倉亮吉・加藤稔・宇野修平・佐藤禎宏『山形県の無土器文化』昭和39年3月
註6 加藤稔「縄文時代(1)―草創・早期」『山形県史・考古資料』昭和44年3月
註7 酒井忠純・江坂輝弥「山形県飽海郡蔵岡村杉沢発見の大洞C₂式の土偶の出土状態について」(考古学雑誌39-314)昭和29年3月

II 表面採集の資料

土器 村上孝之助が表面採集をした土器片は約1,000点に及んでいる。全て縄文式土器であり、縄文時代後期～晩期の磨消縄文を主とする特徴がみられる土器群を主としている。分類した結果、精製土器と粗製土器に大別され、精製土器は15の類に分けられる。その概略とその編年の位置についてあげてみよう。

精製土器 第1類土器 平縁の深鉢に施された刺突文土器。磨消縄文手法を用いて、沈線によって区画された内部に粗い刺突を一面に施文しており、大木10式の仲間とみられる。

第2類土器 分厚い器面に太い棒状工具で刺突し、工具を逆に折り返すことによりもりあがる粘土粒を張瘤のように擬した文様をもつ土器。新潟県を中心とする三十稻場式の搬入されたものではないかと思われる。

第3類土器 (第2図1～9、13～14) 地文の撚糸文や縄文の上に弧線・曲線・渦巻の沈線文を施している土器。仙台湾沿岸地方の宮戸I式(南境式)に比定され、関東の堀之内式に併行するものと考えられる。

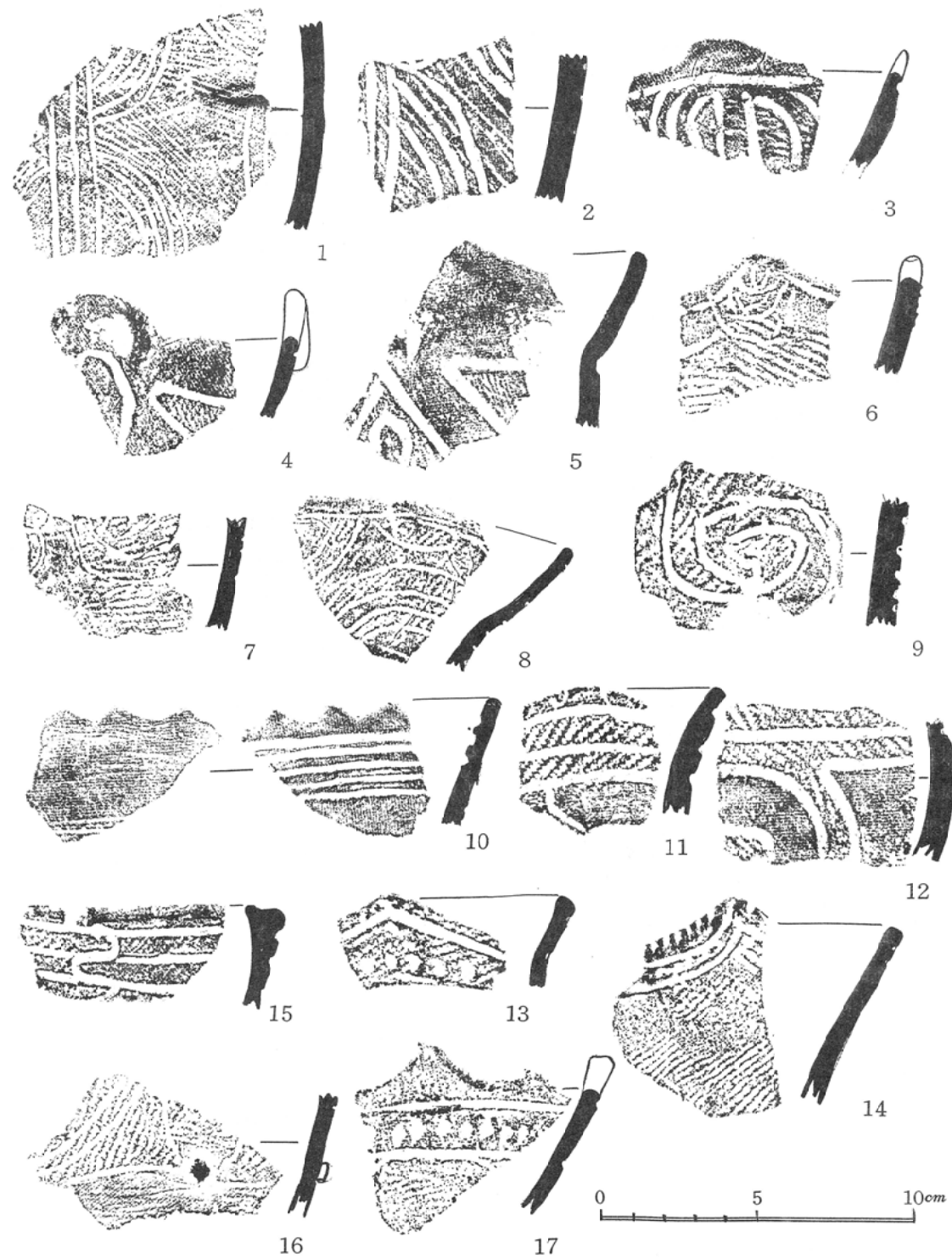
第4類土器 (第2図10) 無文化された浅鉢。口縁内外に数条の平行沈線文を有する土器である。関東の堀之内II式が搬入されたのではないかと考えられる。

第5類土器 (第2図11～12) 磨消縄文による細い帯状の縄文が平行に走り、それによって区画された中に渦巻文を施している土器。仙台湾沿岸地方の宮戸I式(南境式)や関東の堀之内II式に併行するものではないかと考えられる。

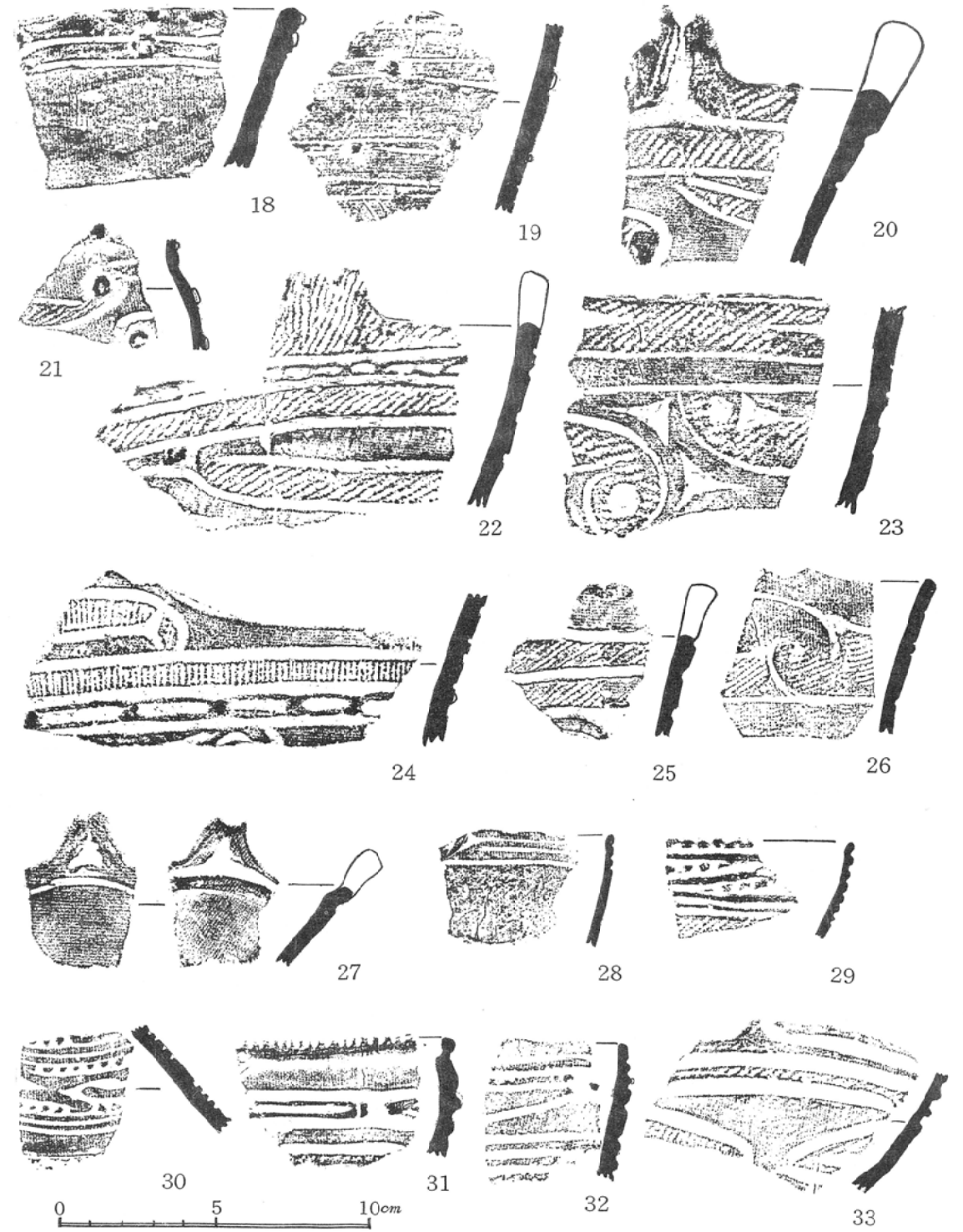
第6類土器 (第2図15) 口縁に平行沈線による数条の縄文帯を走らせ、S字状沈線でたち切って文様を施している鉢である。仙台湾沿岸の宮戸II式(宝ヶ峰式)に比定され、関東の加曾利BI式に平行するものではないかと考えられる。

第7類土器 (第2図16～17) 磨消縄文手法による弧線を連ねた文様(弧線連結文)を施し、その結節部などに張瘤小突起を貼付しているもの。あるいは口縁の平行沈線間に縄文のかわりに刺突を連続する刻目を施したもの。新地式とか金剛寺式と呼ばれた土器群の仲間であり、仙台湾沿岸の宮戸IIIa式に比定され、安孫子昭二氏の「五型式四段階」の第II段階に相当するものと考えられる。

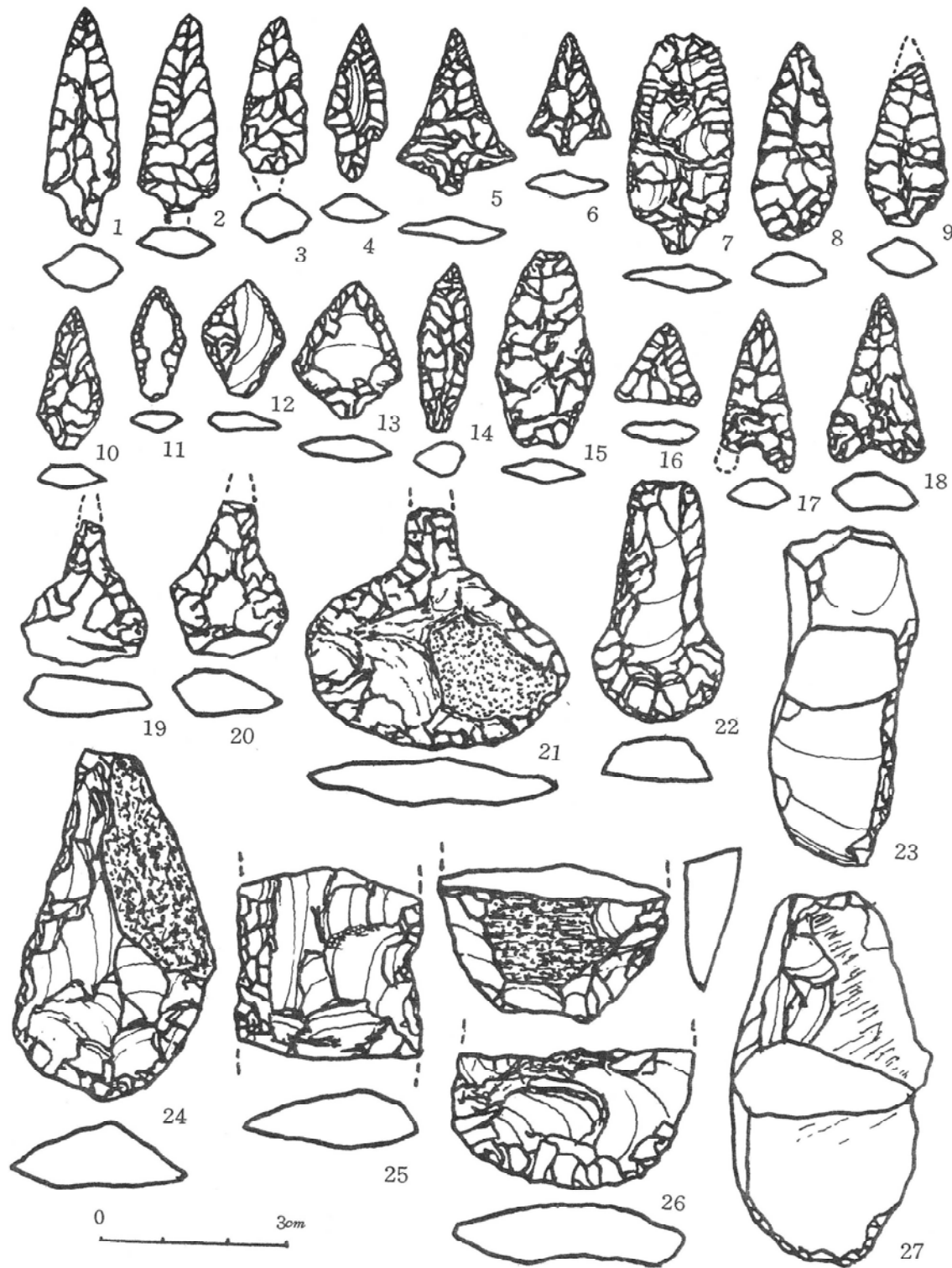
第8類土器 (第3図18～19) 全体が無文化しており、口縁・頸部を走る平行沈線文の



第2図 神矢田遺跡表面採集の土器(1)



第3図 神矢田遺跡表面採集の土器(2)



第4図 神矢田遺跡表面採集の石器

ところどころに張瘤小突起を貼付している土器である。新地式とか金剛寺式と呼ばれる土器群の仲間で、宮戸Ⅲa式に比定され、安孫子昭二氏の第Ⅲ段階に相当するものと考えられる。

第9類土器 (第3図20~24) 磨消縄文手法の入組文に張瘤小突起を貼付したり、三叉状陰刻を施したりしている土器。金剛寺式土器群の仲間で、宮戸Ⅲb式に比定され、安孫子昭二氏の第Ⅳ段階に相当するものと考えられる。

第10類土器 (第3図25~28) いわゆる三叉状入組文を中心とする文様の、大洞B式相当の土器である。

第11類土器 (第3図29) いわゆるシグ状文を中心とする文様の、大洞B-C式相当の土器である。

第12類土器 (第3図30) 刻み目文、X字状文を中心とする文様の、大洞C₁式相当の土器である。

第13類土器 (第3図31) 平行沈線文を中心とする文様の、大洞C₂式相当の土器である。

第14類土器 いわゆる工字文を有する大洞A式相当の土器である。

第15類土器 (第3図32~33) いわゆる変形工字文を有する大洞A'式相当の土器である。粗製土器については、精製土器の各類別土器に伴うものが殆んどであり、発掘資料のところに述べることにして省略させてもらう。

さて、以上の各類別の土器をみると、中期末の大木10式、関東地方の影響の強い後期前半の土器群、東北の土着性の強い後期後半の張瘤文土器群、東北の土着性の強い晩期の亀ヶ岡式土器群が中心としてみられる。非常に長い時期にわたって、この遺跡が営まれていることを明らかにするとともに、現在混迷を続ける東北地方の縄文後期の編年研究の好資料といえる。これらの土器をさらに大量に得て、縄文後期の土器型式による編年研究に期待したいものである。

参考文献

1. 岡本勇・戸沢充則「関東」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』(昭40)
2. 『神明貝塚』庄和町文化財調査報告第2集(昭45)
3. 高堀勝喜「北陸」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』(昭40)
4. 中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館刊(昭41)
5. 林謙作「東北」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』(昭40)
6. 後藤勝彦「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」(考古学雑誌第48巻1号)(昭37)
7. 芳賀良光「宮城県宮古島梨木田遺跡の研究」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史学研究会編(昭43)
8. 後藤勝彦「埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報—南境貝塚—」宮城県教育委員会刊(昭43)
9. 安孫子昭二「谷定遺跡の深鉢とその編年の位置について」(庄内考古学第6号)(昭42)
10. 安孫子昭二「東北地方における縄文後期後半の土器様式」(石器時代第9号)(昭44)
11. 芹沢長介『石器時代の日本』築地書館(昭35)

その他の遺物 (第4図) 土器以外に表面採集された資料としては石器、土偶の断片、栓状耳飾、小玉などがある。ここでは71点に達する石器だけを取り上げておきたい。そのうち半数の34点は石鏃である。有茎、無茎の多様な様相を呈し、神矢田の名に恥じないものであるが、時期的に類別されるのかどうか問題である。そのほか石錐が6点、石匕が3点、石べらが1点、不定

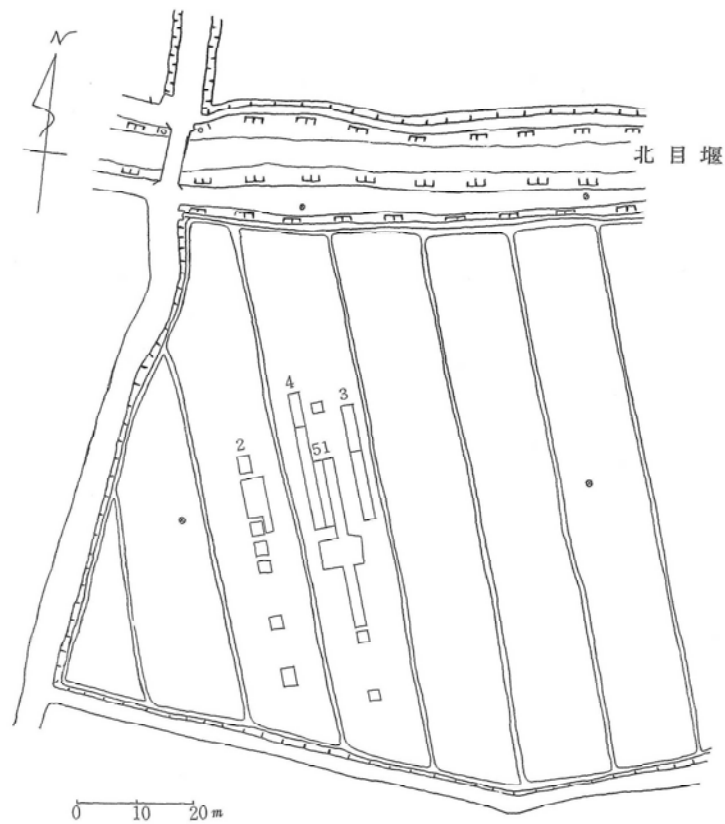
形石器が14点、磨製石斧の破片が12点、石錘が1点であった。また小形スプーン型の石器が1点採集されている。長さ3.9cm、幅2.1cmで裏面には加工がなく、正面周辺のみ整形打が加えられている。

以上のように興味深い表採資料があり、どのような遺構とこれらの資料がどんなつながりをもつかが問題となる。この地方の遺跡としては資料的に整っており、文化の全貌が把握できるのではないかと考えられた。

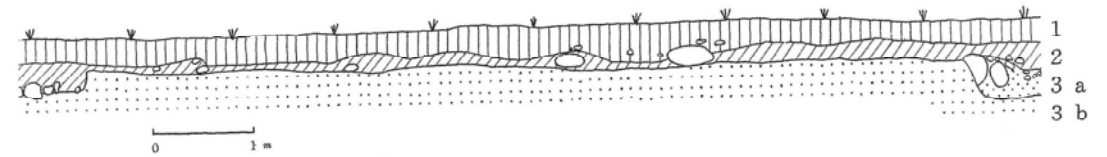
III 発掘の経過と層位 (第5~7図)

二次にわたって延べ224.5m²を発掘調査した(第5図)。遺跡は北目堰の北部にも広がっているが、黄色粘土層が露頭している部分が多く遺物包含層の破壊が激しいと思われたので、北目堰の南部にトレンチを設定した。以前の小さく入り組んだ水田の区画はすでに整地され、詳細な起伏の状態は消滅しているが、遺跡の北東部から南西部へ緩慢に傾斜している。設定したトレンチと北目堰の間はブルドーザーによって削られ、その土壌はトレンチ上とその南部に

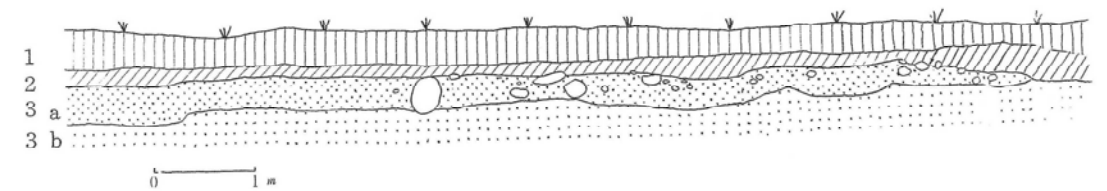
運ばれている。図の畦畔は新たに区画整理されて作られたものである。第1次調査ではその畦畔に沿って50m×2mの第1トレンチ、その12m西側に50m×2mの第2トレンチをそれぞれ南北に長い方向で設定した。このトレンチ内に2m×2mの大きさで15ヶ所程掘り下げていったが、北部の柵目はすでに包含層が削られ、南部は包含層が存在していなかった。第1トレンチの中央部に石皿、第1号炉跡が出土したので東西に拡張した。第2次調査では第1トレンチの東側3mの地点に南北に長い12m×2mの第3トレンチ、第1トレンチの西側1.5mの地点に南北に長い18m×1.5mの第



第5図 神矢田遺跡測量図
(番号はトレンチ名である)



第6図 第3トレンチ西壁層序



第7図 第4トレンチ西壁層序

4トレンチ、第1トレンチと第4トレンチの間を第5トレンチとして11m設定した。土器片や石器類はこれらのトレンチの北部と南部、第3トレンチには少ないが、他の発掘溝からは均等に出土している。第1トレンチからは炉址が3ヶ所、住居址が2ヶ所、第4、5トレンチからは石組が発見された。

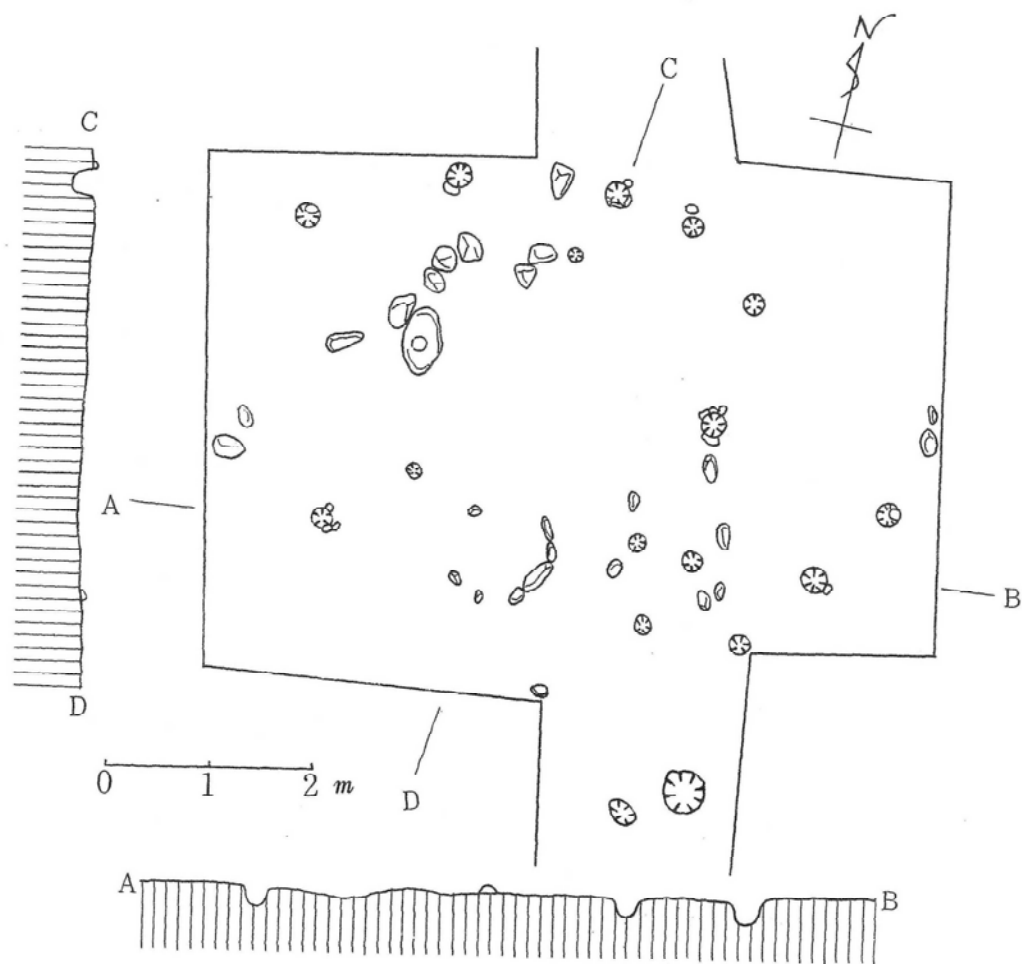
第6図は第3トレンチ西壁、第7図は第4トレンチ西壁の地層断面図である。地表面直下には0~50cm程度のブルドーザーによる攪乱された堆積物があるが、第3、4トレンチは、その堆積物が薄く図面には記入しなかった。地層は4つに区分された。第1層は表土で耕作された地層である。15~40cmの堆積があり暗灰色腐植土層である。遺物は縄文時代中期末葉より晩期末葉までの土器片が出土したが、第2次の堆積、包含と考えられる。第2層は茶褐色砂質土層で7~35cm堆積している。大小の河原石が混入しており、砂質の土壌とともに河川が運搬、堆積したものであろう。高瀬川の氾濫によるものであり、出土する遺物はもちろん2次的な状態である。第3層aは黒色腐植土層で厚い部分は40cmにもなる。第2層と第3層bの間にレンズ状に挟まった形でとらえられた。一次的な遺物包含層である。しかし第4トレンチではこの層中から図版4のように無数の河原石が発見され、その間隙から川の流勢を避けるかのような状態で土器片や石器が発見されたり、河原石の下に押しつぶされて土器片が発見されている。したがって第3層aの形成される最中にも河川の氾濫を受けていることが想定できる。中期末葉から晩期末葉までの土器片が出土しているが、新旧が逆に発見される例も多く、磨滅の激しい土器片も多いのである。第3層aがレンズ状に挿入している状態も、この遺跡一帯に形成されたものが河川の力で削り取られた状態と理解される。住居址や石組、炉址はこの層中から発見された。しかし上記の理由から土器片の一次的包含状態を知ることがむずかしく、時期の断定は困難であった。第3層bは黄色粘土層である。鳥海山の火山灰が堆積して形成されたものである。前記の火山碎屑物となる。遺跡の基盤をなす地層である。この地層の上面の遺構が作

られたのであるが、この層位中から遺物が発見されることは少なかった。

以上のような層序が発達している中で、主たる遺物包含層は第3層aである。遺物の包含状態が良好なところ、例えば第2トレンチでは第3層aの上部より大洞A、A'、C₁、C₂式の土器、中部から大洞B、B'C式の土器と後期後半の土器、下部から加曾利B式、堀の内II式の土器が出土している。第4トレンチ3区でも第3層aには晩期初頭の土器、第3層bには後期初頭の土器が突き刺した状態で出土している。河川による遺物の攪乱が多い中で編年的手がかりを提示する個所もあった。

IV 遺構

神矢田遺跡で発見された遺構は炉址1ヶ所、住居址2ヶ所、石組1ヶ所である。いずれも第3層aより発見されている。以下その概況を述べておきたい。



第8図 第1トレンチ第1号住居址

第1号炉址 (図版5) 第1トレンチの拡張区のほぼ中央に出現したもので、第3層aの上部にあり、拡張したのはこの炉址をめぐる住居址を追跡するためであった。大小13個の河原石で囲われたものであるが、南西部に石がなく開口していたのであるか、欠損したのか不明である。石の小さいものは9cm、長大なものは22cmの大きさである。楕円状に形成されている。南西端は92cmの幅をもち、北東をさす長軸は102cmであった。若干木炭片が検出されたが、河原石はそれほど焼けた痕跡はなかった。この炉址をめぐる確かな柱穴は得られなかった。屋外に形成されたものかもしれないが、不確かな床面で土壌に柱穴らしい変化を見出すことも困難であった。後期末葉の土器片が同じ地層面には多く、炉址の内部から後期初頭の土器がわずかに発見されているが、時期は後期末葉と考えるのが妥当であろう。

第1号住居址 (第8図) 第1号炉址を排除しさらに掘り下げていった結果、第3層aの下部から発見された住居址である。17本の柱穴が発見され、第3層bに掘り込んだ状態になっていた。直径は14cm~42cmであるが、南端にある42cmの穴は深さが19cmであり、柱穴以外の機能を考えた方がよいのかもしれない。柱穴の深さは10~22cmであった。8本の柱穴が1~4個の根固石をもっている。柱穴の並びが不規則で、時期を異にするものがあるかもしれないが、内部の補助的な柱穴を除外して考えれば、直径6~7mに達する大きさと思われる。その中央部に炉址がある。木炭片が散乱し7個の河原石が第3層bに固定されて、直径94cmの円形に囲まれている。その炉址の1.2m北西部に石皿が出土した。この石皿は長径65cm、短径40cmの楕円形をした扁平な自然石で、その上面には直径16cmのくぼみが作られている。周壁と思われる状態はなく、住居を掘りくぼめた形跡も発見できなかった。平地式住居址といってよかろう。出土する土器は床面の全体的に後期末葉の土器片が多い。わずかに遺構の北部に後期前半の土器片が出土しているが、住居址の時期は後期末葉と考えてよかろう。

第2号住居址 (図版3) 第1トレンチと第5トレンチの北部から発見された住居址である。完掘されていないのでその全貌は不明であるが、直径4.2mの住居址の西側が半分出土した。7本の柱穴が発見され、そのいずれもが穴の周辺に数個づつ根固めの河原石が設置してあった。柱穴の直径は30~40cmであり、深さは20~30cmであった。中央のやや西寄りに真赤な焼土があり、直径90cmの円形の内部には数個の焼けた石が出土している。この炉址は石囲いが設定されていなかった。炉址の西側には第20図の石皿が置かれていた。また住居址の南側に60cmの带状の浅い粘土帯が発見されているが、周壁の一部であろう。この住居址は第3層aの最下部に発見されたもので、後期初頭の土器もいくつか出土しているが、晩期後半期の土器片が圧倒的に多いので、晩期後半期に作られた住居址と考えてよかろう。

第1号石組 (図版3の左下) 第2号住居址の南西部に接近して第4・5トレンチから発見された石組である。第3層aの下部に出土したもので、長軸1.45m、短軸0.55cmの楕円形を呈している。17個の河原石で囲んでおり、河原石の多くは30cm前後の扁平なもので第3層bに埋め込まれていた。欠失している部分があるが、後に除去されたものであろう。特別に伴出する遺物はなかったが、石組の東側から土偶が出土している。後期前半の遺構と考えられる。

このほか第1号住居址の北3mの地点から長さ50cmを越える半分欠けた長大な河原石がやや傾いた状態で発見されている。断面の直径は30cmに近く、もとは直立していたものと思われる。第3層aの上部にあり、関連する遺構は不明であるが立石の可能性はある。

V 遺物

土器 発掘された土器は完形品3個、破片約15,000点に及んでいる。殆んど縄文時代後期～晩期にわたるもので、わずかに中期のものを含んでいる。精製土器と粗製土器に大別でき、その数量比はおおよそ1:3である。これらの土器片は各トレンチにおいて層および層内の深さ毎に区分して、分層発掘方法を用いて掘り出されたが、地層そのものが攪乱状態にある部分が多く、結果は良好でない。したがって、土器の形態的特徴によって分類を行なった。その結果を次に述べよう。

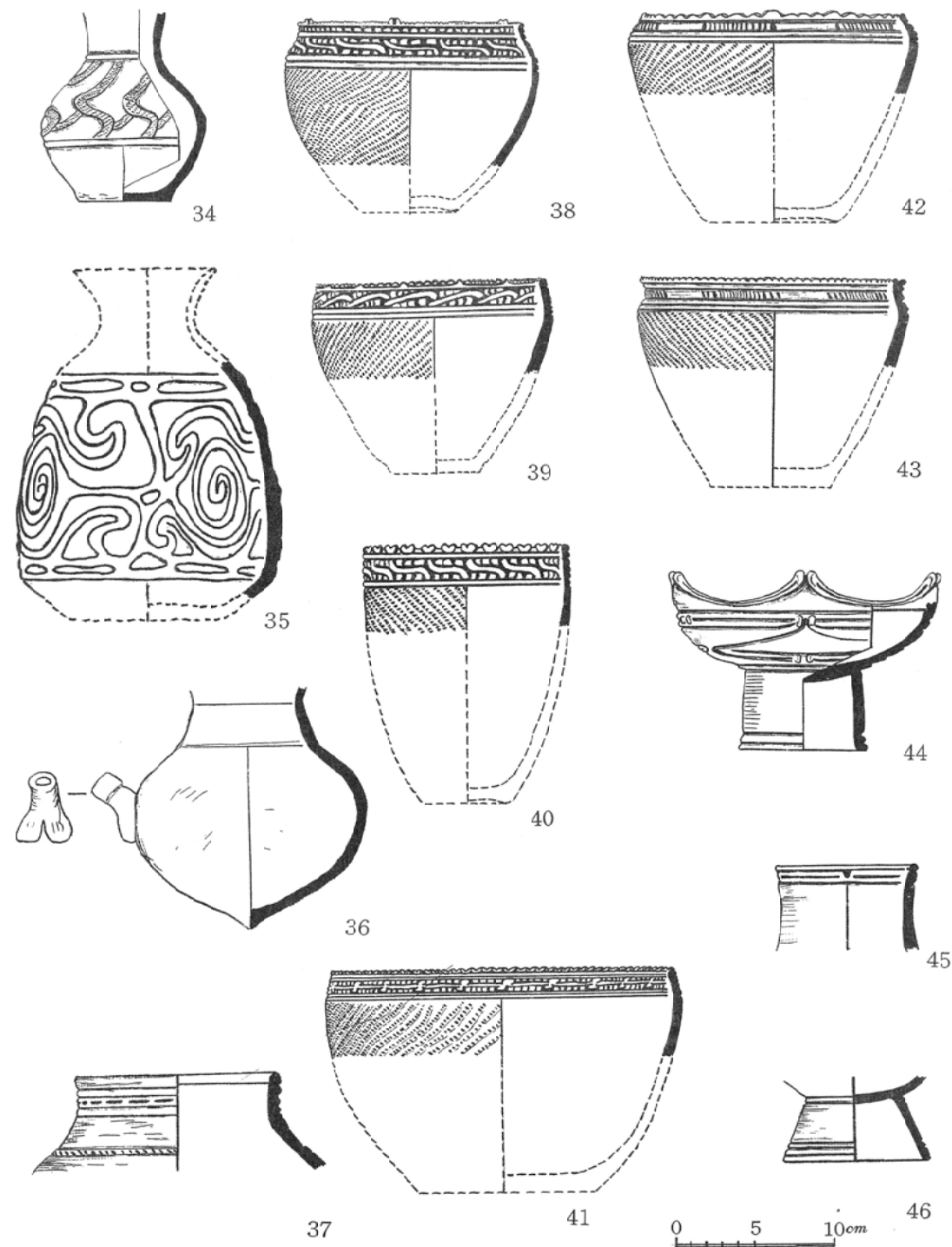
精製土器 第1類土器 土器片の量が少なく、全体が明確ではないが、口縁が直上または外反する深鉢の体部上半とみられる。器壁にさらに胎土を貼付して厚くしたとみられる複合口縁である。磨消縄文の手法がみられ、かなり太い沈線によって囲まれた内部に、太い棒状工具による粗い刺突文が施されている。磨消の部分は後に貼付した胎土によってややもり上がっている。

第2類土器 (第11図 47～49) これも土器片の数が少ないので、全体が不明確であるが、口縁がやや外反する深鉢らしい。平らな口縁に沿って、耳のような稜線による鱗状突起形ばかり施されているもの、波状口縁のもの(47)がある。比較的太い沈線で区画される、撚糸文を地文とする磨消縄文が施されている(47～49)。この磨消縄文は大きく巾広く曲線的に施される。厚手の土器である。

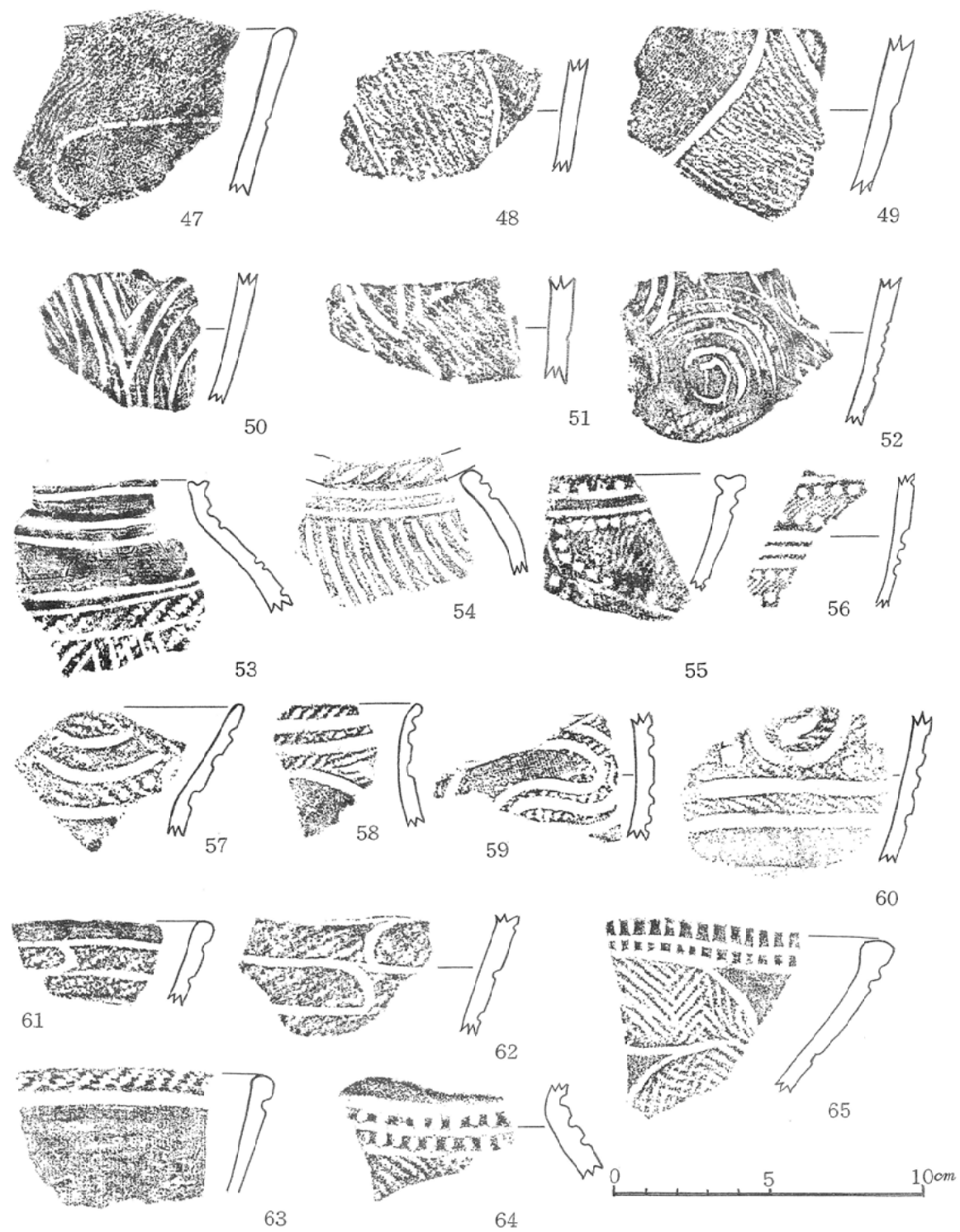
第3類土器 これも数が少ないので全体が不明確であるが平縁または大波状口縁の深鉢らしい。体部上半に、縦に、あるいは横に隆線を走らせ、文様区画を構成しているのが特徴的であり、二つのグループがあるようである。

aグループは地文が縄文で、隆線を境とする一方を磨消してしまう。LR撚り単節の斜縄文がみられる、厚手の土器である。bグループは口縁の波頂から下に縦に隆線を走らせ、刻みを入れて8の字状にしている。地文として非常に細かな無節・単節の斜縄文を施し、隆線を境にして傾むきを異にし羽状となっているものもみられる。やや薄手の土器である。

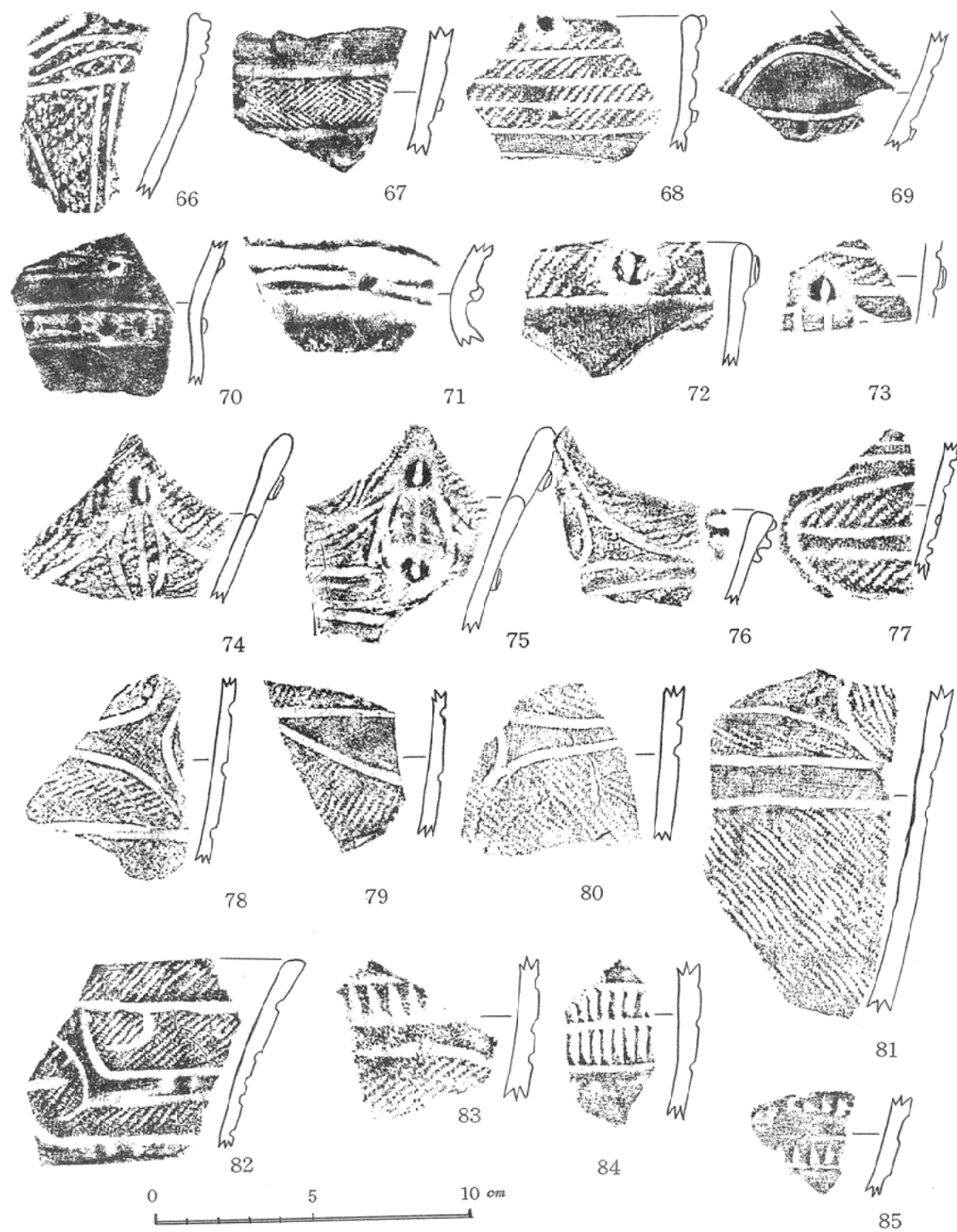
第4類土器(第11図66, 第10図50～54) 口縁がゆるやかに波状をなし、少々外傾する鉢形、平縁で内反する肩の張り気味の変形などの器形がみられる。磨消縄文は口縁に用いられ、あまり目立たない。地文として斜縄文・撚糸文を用い、その上に太いへら描き沈線で弧線文・渦巻文・8字状連弧文などを展開させている。沈線の用い方も2～3条ずつ組み合わせ用いたり(50～51, 53, 66)、太い櫛歯状沈線を用いたり(54)している。口唇に一条の溝を走らせたり(53, 66)、刻みを入れたり(54)しているものもある。やや薄手の土器である。



第9図 発掘土器実測図
(神矢田遺跡出土の土器の実測図)



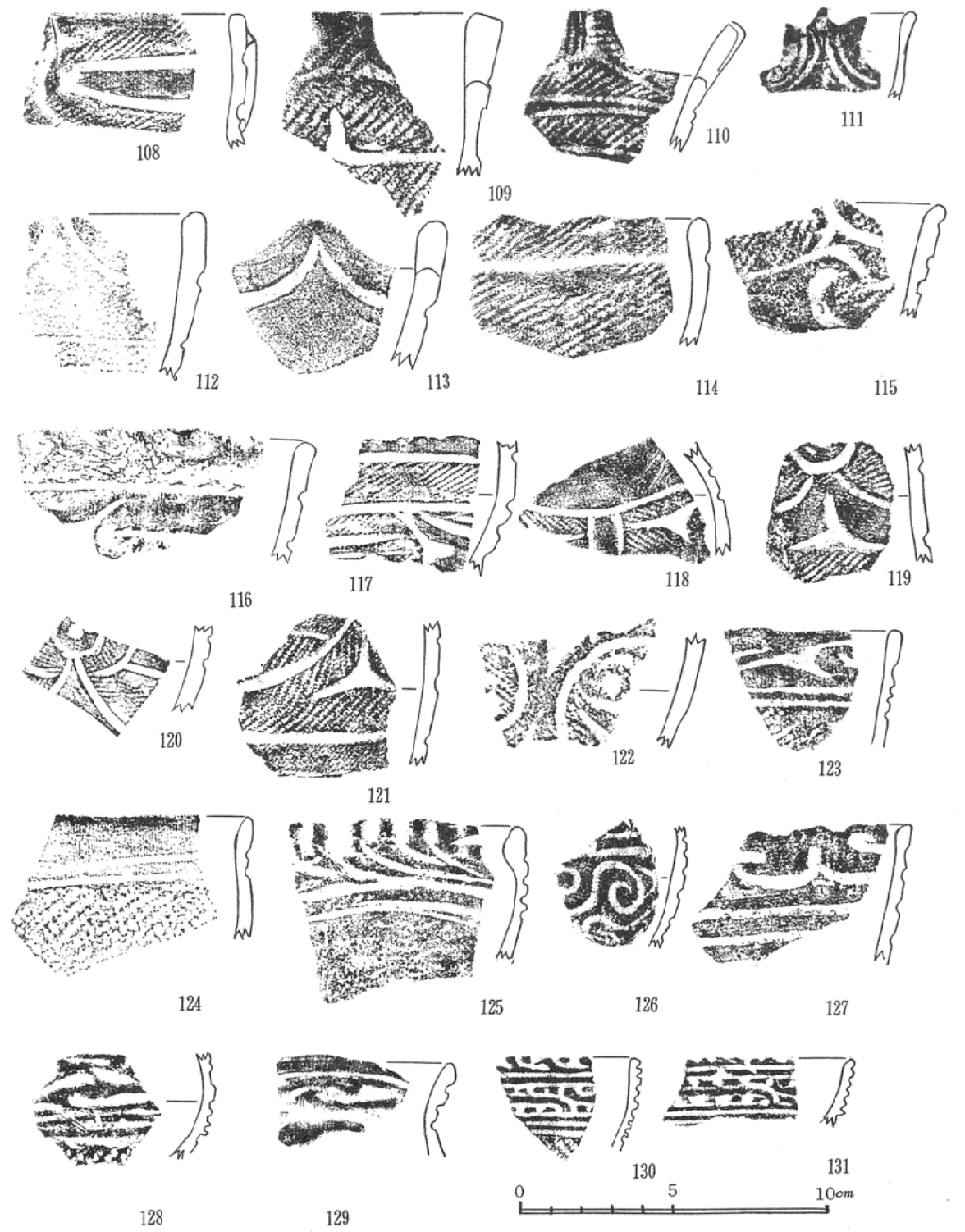
第10図 神矢田遺跡出土の土器の拓影(1)



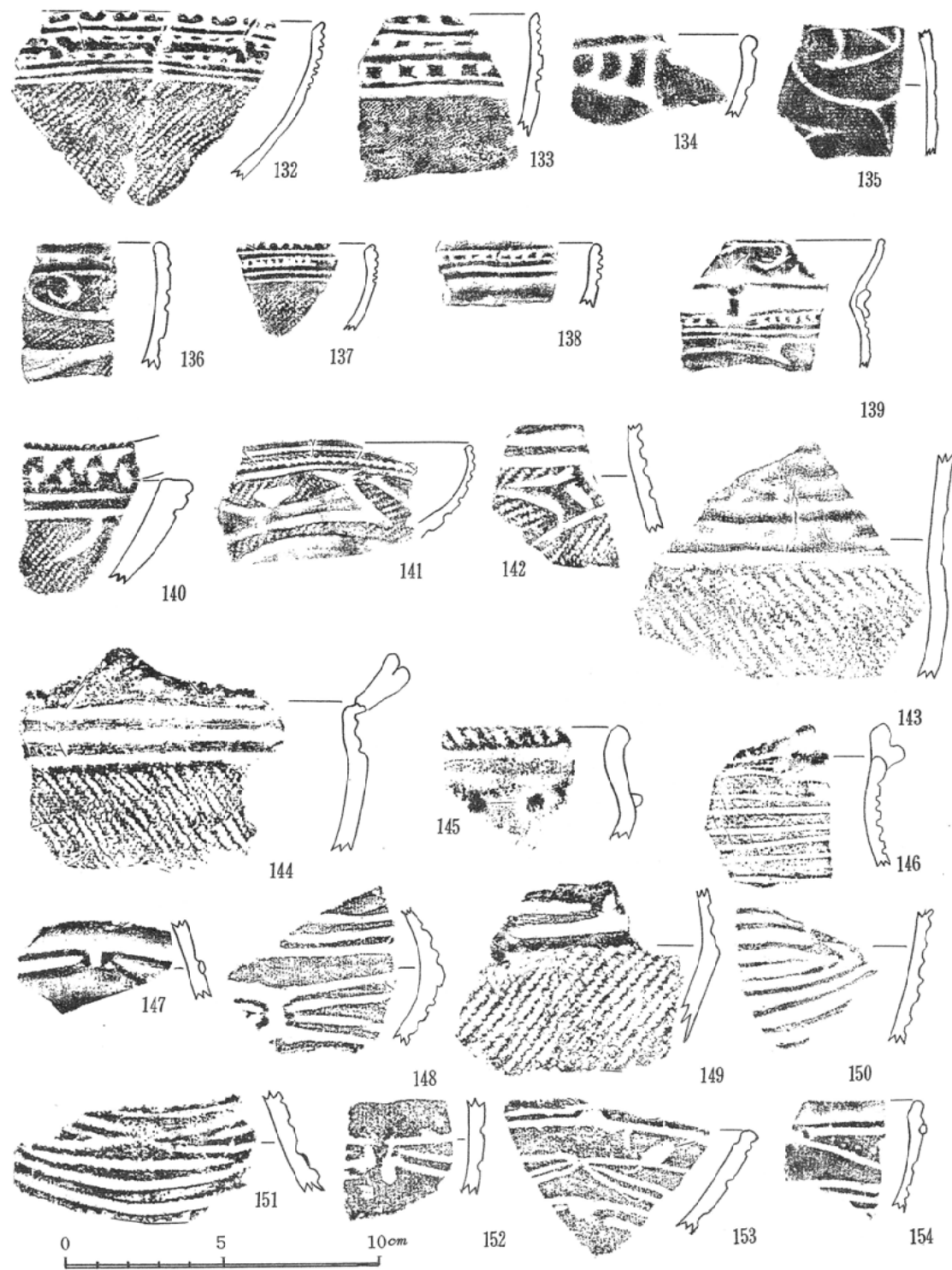
第11図 神矢田遺跡出土の土器の拓影(2)



第12図 神矢田遺跡出土の土器の拓影(3)



第13図 神矢田遺跡出土の土器の拓影(4)



第14図 神矢田遺跡出土の土器の拓影(5)

第5類土器(第10図55、56) 平らな肥厚した口縁の鉢である。また大波状口縁に口縁突起を有する鉢形もみられる。地文を縄文とする曲線的な磨消縄文が施され、口縁の縄文帯や磨消部分を区画する沈線と残された縄文の間に連続刺突文を施している。刺突は第1類の大粒の粗いものとはかなり様相を異にする。小さな竹管状工具でいねいに施文している。沈線は太く深く施している。口唇に溝を走らせたり、口縁内面に沈線を走らせたりしている。薄手の土器である。

第6類土器(第9図34、35、第10図57~60) 波状する口縁がやや外反し、頸部でギュッとし胴で張る鉢。平らな口縁が外反し、頸部でギュッとしまり、胴部でふくらむ壺もある。太い深い沈線によって磨消縄文手法で縄文の紐(帯)をつくり、それによる曲線に富む文様を展開させている。波状口縁の舌状突起状の波頂部に弧線を施したり(57)、口縁にそって三本走らせたり(58)渦巻のとけたようなS字風な文様を施したり(59)している。胴部上半に文様帯を構成する意味に施された縄文紐帯もみられる(60)。S字状に縄文帯でつくり、それを横につないだものもある。この縄文紐帯の要所には丸い刺突が施される(57、60)。薄手の土器である。縄文は単節斜縄文を横位・斜位に施文している。

また、とっくり形の壺で、縄文を施さず、二本の沈線によりあたかも隆線か縄文紐帯のように渦巻文やS字文を連ねたものがある(34)。朱塗りの明褐色の土器である(35)。

第7類土器(第10図61、62) やや肥厚した、平らな口縁が外傾する鉢形土器である。口縁部に数条の太く深い平行沈線を横走させ縄文帯となし、他は縄文を磨消して無文となっている。この縄文帯を一定間隔をおいてS字状沈線で切っている。縄文はすべてLR撚り単節の斜縄文である。やや薄手の土器である。

第8類土器(第10図63~65) 内側に肥厚した平らな口縁が外傾し、頸部でしまり、胴部でやや張る深鉢。またゆるやかにカーブを描いた大波状口縁が外傾し、頸部でしまる胴張りの深鉢。全体が球形に近くふくれあがった壺などがある。口縁部・頸部には沈線によって区画された、磨消縄文手法を用いて施された縄文帯または刻目帯がみられる。縄文帯の場合は、縄文帯と縄文帯によって区画された口縁部の文様帯は研磨無文化化されてしまっている。刻目帯の場合はその文様帯には入組風の曲線的な磨消縄文が展開する。縄文は単節の斜縄文を横位に回転施文したものが中心をなすが、縦位に羽状に施文されたものがある(65)。

第9類土器(第11図67) 量が少なく、不明確であるが、器形は第8類土器および第10類土器と殆んど同じと考えられる。やはり、太い沈線によって区画された磨消縄文の帯が、あたかもテープをまきつけたかのように大きく曲線を描いて展開する。縄文は細かな単節の斜縄文であるが、複雑な羽状もしくは格子状に施文されているのが特徴的である。そして縄文帯の上になりに小粒の張瘤小突起がまばらに貼付されている。

第10類土器(第11図68~71) 平縁または大波状の口縁が外弯気味に上に開き頸部でしまる胴張りの深鉢である。口縁・頸部には1~2の磨消縄文の帯で区画された文様帯があり、弧線を組み合わせ木の葉のような文様を次々に連結していく一種の入組文(弧線連結文)が施される。

弧線の内部を磨消するもの、外部を磨消するものの両方がある。また、口縁部の縄文帯を4本にしたものもみられる(68)。縄文帯や弧線の結び目などに一定の原則に従って、第9類のと殆んど同じ、小粒の張瘤小突起が貼付される。また、口頸部の縄文帯の縄文と弧線連結文を磨消して無文化し、張瘤小突起を多用したのものもある(69)。縄文はLR撚り単節の斜縄文で横位に回転施文している。沈線はやや細くなっている。無文化して沈線や沈線間の無文体を強調するためにわざと沈線を太く深く施したのもみられる(71)。

第11類土器(第11図72~81) 器形はやはり口縁の開いた頸部でしまる胴張りの深鉢で、口縁・頸部の縄文帯によって区画される文様帯に弧線連結文を要し、ところどころに張瘤小突起を貼付する土器。第10類と異なるのは、弧線連結文が扁平化・入組文化している(78~81)こと、張瘤小突起が大きくなり、半割したボタン状・三割した縦長の張瘤小突起を施している(74~76)ことなどで、縄文は単節の斜縄文で細かくLR撚り、RL撚りの双方がみられる。

第12類土器(第11図83~85) 器形は口縁が直上するか、やや外に開くかするもので、そのまま胴部へすらりと続く半割卵形である。口縁には肥厚した張瘤小突起が舌状の口縁突起としてつけられ、小波状口縁の態をなす。口縁や頸部に刻目帯を走らせて区画した文様帯には入組文を施している。沈線は太く、刻みを間隔をあけ、太く深く入れている。磨消縄文による入組文に施された縄文はLR単節の斜縄文を横位に施文している。刻目帯にはさまれた文様帯内部は入組文が磨消され、無文化しているものが多い。

第13類土器(第11図82、第12図86~104) 肥厚した口縁が上に開き、外傾またはわずかに外湾し、頸部でしまる胴張りの深鉢や壺である。口縁には張瘤による口縁突起が大小交互に配置される。口縁突起は太く、深い刻みを入れて2~4に分割される。口縁・頸部に施される縄文帯により区画された文様帯には磨消縄文による入組文が施される。入組文は一般に扁平化し、横に長く段々に、あるいは波状に走る。入組文は左上~右下へ走る右傾のものとは右上から左下へ走る左傾のものとは両方あるが、右傾がやや多くみられる。縄文は左傾が多い。殆んど単節の斜縄文で横位に施文されたものである。口縁突起の下部や入組文の結節に三叉状陰刻や三叉状疣を施すものが多い。入組文を施さず一面に斜縄文を残すもの(102~103)もある。入組の結節にボタン状の大きな張瘤小突起を貼付するものもある(96)。二ヶ単位の張瘤小突起のかわりに二ヶ単位の刺突を加えたものもある(82)。

第14類土器(第9図36、37、第12図105~107) 肥厚した平らな口縁に張瘤小突起による口縁小突起をつけた、口縁が開き、頸部でしまる胴張りの深鉢。口縁・頸部に施された平行沈線間に櫛状工具で刻みを入れた刻目帯によって区画される口縁部文様帯に同じ刻目による入組文を施している。口縁突起の下に弧線を施し、口縁突起を研磨し、無文化したり(105)、口縁突起に弧線を施し、さらに刻目を加えたり(106)、平行沈線によって区画される細い無文帯に鎖線を施したりするものもある。また、全く無文化した壺に平行沈線を施し、その間に鎖線や刻み目を入れたものもある(第9図37)。わずかに小さな張瘤小突起がつくこともある(107)

第15類土器(第13図108~132) 小波状の口縁がやや開いて頸部でしまる胴張りの深鉢か、

頸部でしならず胴部へ移行する深鉢や壺がある。第14類にみられる入組文に加えられた三叉状の陰刻(疣)は沈線と結びつくものが多くなり、口縁突起に加えられる八の字形沈線になるもの(109~113)、玉抱き三叉文になるもの(115、116)、三叉状陰刻が入組の結節部から独立して主文様を構成するもの(118、121)、魚眼状文になるもの(119、120)などがみられる。口縁に張瘤による口縁突起をもつ場合は口縁が肥厚するが、最初からの小波状口縁の場合は、口縁は肥厚しない。口縁突起は低いもので舌状に近くなっているものが多い。縄文はLR撚り単節の斜縄文が殆んどで左傾のみである。

第16類土器(第13図123~129) 小波状口縁の直上する、半割卵形に近い深鉢、球がやや扁平化したような底の小さな注口がみられる。鉢形土器の場合は巾のせまい口縁部の1~2本の平行沈線によって区画された口縁部文様帯に三叉状入組文が施される。この文様帯内部は無文化され、三叉状入組文が陰刻される。胴部はLR撚り単節の斜縄文が施される。壺の場合は渦巻沈線にS字状文が胴部に施される(126)。また注口では無文のもので、底部が小さく鈍角の尖底になり、球を上下に扁平化したような器形で、注口部に二つの袋状張瘤がつけられる。一条の沈線が加えられている。

第17類土器(第9図38~40、第13図130、131、第14図132、133) いわゆるシグ状文を有する仲間。口唇を刻むようにしてつくられた小波状口縁が直上するか、やや内傾するかで、やや肩の張った鉢形土器。口縁が内湾し、腰の張った、上下に圧縮された注口土器。鉢形土器は2~3条の沈線によって区画された口縁部文様帯に、左傾で末端のかみあうシグ状文(39)、右傾で末端のかみあわないシグ状文(38、40、131、132)などがみられる。胴部の縄文はLR撚り単節の斜縄文が殆んどであるが、RL撚り単節の斜縄文もみられる(40)。注口ではシグ状文やk字文などがみられる。

第18類土器(第9図41~43、第14図134~143) 口唇を刻むような小波状口縁の直上または内湾し、肩の張った鉢形土器。頸部に施される平行沈線に一定の間隔毎に刻みを入れて、浮彫手法で施されたx字状文(135)をもつ注口土器などがある。頸部のくびれたところに縦長の小突起を貼付したものもある(140)。また、大腿骨文、x字状文を磨消縄文手法で施したもの(140~152)もある。縄文は細かな単節斜縄文で、LR撚りのほうが多い。異条斜縄文もみられる(41)。

第19類土器(第14図144~146) 小波状口縁の外反する、肩の張った鉢形、平縁の、口唇に刻みをもつ鉢(145)がある。波状口縁といっても口唇から半割された口縁突起をつけたものである(144、146)である。文様は頸部に2~5、6条の平行沈線文だけで、胴部は斜縄文が施される。単節の斜縄文であり、LR撚りのほうが多い。頸部と肩部の境に二ヶ単位の張瘤小突起を有するものもある(145)。

第20類土器(第9図45、46、第14図147~153) 平縁の鉢、壺、台付鉢がある。壺の場合は口縁部、台付鉢の場合は台の下半部にも、鉢の場合は胴部上半に、いわゆる工字文を施している。鉢の胴部には斜縄文が施されている。縄文はやや粗い粒のものも多く、単節のもの

が中心となっている。口縁裏側に一条の沈線をもつものが多い。

第21類土器 (第9図44、第14図154) 口縁突起を有する大波状口縁の台付鉢、平縁の、口唇に刺突列点文を有する鉢などがある(154)、主文様はいわゆる変形工字文で、第20類の工字文が流動的に斜線で結び合っている。この変形工字文の結節には二ヶ単位で、張瘤小突起が貼付される。口縁内側に一条の沈線を施すものもあり、また内側中央部に直径2cm程度の円沈線文が描かれているもの、口唇に溝(1条の沈線)をいれたりしているものなどがある(44)。

以上の第1類から第21類までの土器はトレンチ毎に出土量のおおよそをあげると下表のようになる。

分 類	1トレンチ	2トレンチ	3トレンチ	4トレンチ	5トレンチ
第 1 類 土 器		○		○	
" 2 "		○			○
" 3 "	○	○	○	○	
" 4 "	◎	◎	○	◎	○
" 5 "	○	○		○	○
" 6 "	○			○	
" 7 "	○	○		○	○
" 8 "	○	○		○	
" 9 "		○		○	
" 10 "	○	○		○	○
" 11 "	○	○		○	○
" 12 "	◎	◎		◎	○
" 13 "	○	○		○	○
" 14 "		○			
" 15 "	○	○		○	○
" 16 "	○	○		○	○
" 17 "	○	○		○	
" 18 "	○	○		○	○
" 19 "	◎	○	○	○	○
" 20 "	◎	○	○		○
" 21 "	○			○	

◎印は200片以上 ◎印は200片未満～100片以上 ○印は100片未満

粗製土器 粗製土器の分類は、文様と器形等の関連の把握まで行わなければならないが、量的にも多い上、分類区分が微妙であるため、難しい。現時点では文様分類が終了し、器形、胎土等を加味した分類作業を行なっている最中なので、文様分類を先ずあげて、次に現時点で得た程度の分類結果をあげることにしたい。

《粗製土器の文様分類》

A. 縄文土器

1. 無節斜縄文(横位に回転施文)

イ. LR捻り ロ. LR捻りで結節の加わったもの ハ. RL捻り ニ. RL捻りで結節の加わったもの。

2. 単節斜縄文(縦位、斜位に回転施文)

イ. LR捻り ロ. LR捻りで口縁部を磨消したもの ハ. RL捻り ニ. RL捻りで口縁部を磨消したもの。

3. 単節斜縄文(横位に回転施文)

イ. LR捻り ロ. LR捻りで結節の加わったもの ハ. RL捻り ニ. RL捻りで結節の加わったもの。

4. 複節斜縄文(横位に回転施文)

イ. LRL捻り ロ. LRL捻りで結節の加わったもの ハ. RLRL捻り ニ. LRL捻り

5. 異条斜縄文(横位に回転施文)

6. 羽状縄文(縦位、斜位に回転施文)

イ. 単節(LR捻りもしくはRL捻り) ロ. 単節(LR捻りもしくはRL捻り)で口縁に磨消の加わったもの(沈線で一線画したものを含む)

7. 羽状縄文(横位に回転施文)

イ. 単節(LR捻りもしくはRL捻り) ロ. 単節(LR捻りもしくはRL捻り)で、結節の加わったもの

8. 撚糸文(縦位、斜位に回転施文)

イ. 単節 ロ. 単節で口縁を磨消したもの ハ. 網代状撚糸文 ニ. 無節の撚糸圧痕文、ホ. 単節の撚糸圧痕文

B. 櫛歯状沈線文

1. 櫛歯状沈線文 2. 刷毛目文 3. 刷毛目状条痕文

C. 無文

イ. 無文 ロ. 無文で口縁を研磨したもの ハ. 口縁突起をもつ無文

これらの粗製土器の出土量をトレンチ毎に示せばおおよそ次頁のようになる。

なお、表中の比は破片数の比である。

文 様 分 類		1トレンチ	2トレンチ	3トレンチ	4トレンチ	5トレンチ	比
繩	無節斜縄文	○	○		◎	○	7
	単節斜縄文	◎	◎	○	◎	◎	
	複節斜縄文 (異条も含む)	○	○	○	○	○	
文	羽状縄文	○	○	○	○	○	1
	撚糸文	○	○	○	○	○	2
櫛 歯 状 沈 線 文		○	○		○	○	1
無 文		◎	◎		◎	◎	3

◎印は400片以上 ◎印は400片未満 200片以上 ○印は200片未満

以上のように文様によって分類されるわけであるが、器形・胎土等を含めた分類はどうであろうか。まだ分類作業が完全に終了しておらず吟味も不十分ではあるが、本遺跡出土の土器を少しでも理解していただくために、本稿が中間報告であり、修正の機会も可能なので、一応あげておきたい。

第1類土器 器形は、平らな口縁がほとんど直立し、直上が、わずかな外反で頸部でそっとしまり、胴部で張る、円筒的な胴長の深鉢である。縦位・斜位に回転施文される撚糸文および粗い斜縄文を有する厚手の土器である。口縁を磨消しているものもあり、一条の太い沈線で縄文部分と磨消部分を区別したものもある。ほとんど単節である。

第2類土器 器形は、平らな口縁がやや外傾し、上に開いた厚手の深鉢である。縦位、斜位に施文される撚糸文、粗い斜縄文を有する。口縁を磨消したもの、沈線で磨消部分を区画したものなどもある。ほとんど単節である。

第3類土器 器形は、ゆるやかに大きく波状をなす口縁が、やや外反し、ゆるやかにしまり腰部で張る深鉢である。縦位・斜位に施文される斜縄文を有する。ほとんど単節である。

第4類土器 器形は、平らな口縁が外弯、外傾し、第1類～第3類よりやや小さな底部へすぼまる、半割卵形に近い深鉢である。横位に施文される羽状縄文を有する。また、縦位、斜位に一度回転した原体を折り返して羽状となした羽状縄文もみられる。ほとんど単節である。

第5類土器 器形は第4類とほとんど同じ深鉢である。刷毛目状文が施文されている(刷毛目文、刷毛目状条痕文)。

第6類土器 器形は、第4類とほぼ同じであるが、底部はさらに小さくなっており、小さな底部は上げ底になるものが多い。また、口縁がわずかに肥厚しているものが多い。横位に施文された単節の斜縄文を有する。まれに羽状縄文もみられるらしい。

第7類土器 器形は第6類とほとんど同じ深鉢である。櫛歯状沈線文が施文されている。櫛歯状沈線文を縦にしたもの、格子状の撚糸圧痕文などである。

第8類土器 器形は、第6類とほとんど同じであるが、無文の深鉢である。口縁に小突起

を有するものもある。底部は小さい。

第9類土器 器形は第6類とほとんど同じであるが、口縁がすぼまる傾向がみられる深鉢であるが、肩部が張り出している傾向もみられる。様々な斜縄文をもち、結節の加わったものもある。羽状縄文も多い。

出土土器についての考察 本遺跡出土の土器を、精製土器は21類に、粗製土器は9類に分類できたので、次にそれらの編年上の位置を考察してみよう。

さて、これらの土器群は、磨消縄文を主とするもので、縄文時代後期より晩期にわたるものであることは前述の通りである。東北地方南部では、これらの時期の土器型式による編年を次のように大づかみに把握している。後期は、①線刻渦巻文系の南境式→②磨消縄文の発達した宝ヶ峰式→③張瘤をさかんに用いる新地式・金剛寺式の変遷である。晩期はいわゆる亀ヶ岡式土器群で、大洞B式→大洞B-C式→大洞C₁式→大洞C₂式→大洞A式→大洞A'式の変遷である。ところが、晩期の編年については定着しているが、後期の編年については、大綱がわかった段階で、型式把握も不十分であるとされてきた。それで、後藤勝彦氏は宮戸島の貝塚より出土した土器をもとに、宮戸I式→宮戸II式→西ノ浜式→宮戸III a式→宮戸III b式なる編年を打ち出されたのであった。斎藤良治氏は、宮戸III a式を二つに分けた編年を発表されている。一方、安孫子昭二氏は、西ノ浜式→宮戸III a式→宮戸III b式にあたる、いわゆる「コブ付土器」の編年を「五型式四段階」に把握する編年を発表されている。こうして変遷の順序については明らかにされてきているが、型式としての土器把握はおたがいにやや異なった見解をもっている。本遺跡出土の土器はこうした研究状況におかれているのである。

さて、本遺跡出土の土器の場合はどのように把握することができるであろうか。次にのべてみよう。

第1群土器(精製第1類土器、精製第2類土器、粗製第1類土器)

精製第1類の刺突文土器は、明らかに大木10式に比定されるものである。精製第2類土器は中期末の大木10式に入るものか、後期初頭に入るものか、資料が少ないため決め手がみつからない。しかし、撚糸文による磨消縄文は大木10式において盛んに用いられておることから、やはり大木10式に比定しておきたい。粗製第1類土器は中期の要素を強くもつことから、精製第1類、第2類に伴っているのではないかと考えられる。

第2群土器(精製第3類土器、粗製第2類土器)

精製第3類の隆線(稜線)を用いる土器は手法的には関東地方の称名寺式・堀之内I式にもみられるが、様相はかなり異なる。宮戸I式でもみられるが、袖窪式に共通した点がある。かなり中期的要素が強いことも考えれば、袖窪式または宮戸I式の古いほうに比定できるとみてよいであろう。粗製第2類土器は器形では大木10式の範疇を越えているのでこの仲間と考えられる。

第3群土器(精製第4類土器、粗製第2類土器)

精製第4類の線刻渦巻文の土器は、東北地方南部において顕著な土器で、堀之内I式と共通

した文様手法をもち、宮戸Ⅰ式（南境式）に比定される。撚糸文が多く用いられるので、粗製第2類土器はこのグループにも伴うものではないかと考えている。

第4群土器（精製第5類土器、精製第6類土器、粗製第3類土器）

精製第5類の刺突列点を有する磨消縄文土器は、大木10式にみられるような粗い刺突ではないし、口唇や口縁内側に沈線を施す手法をもっており、掘之内Ⅱ式に共通した手法をみいだせる。また、精製第6類の縄文紐帯による弧線や渦巻などの文様を施す手法は掘之内Ⅱ式にみられる。東北では、縄文をもち沈線だけであるが、大湯式に共通性をみいだすことができる。したがって大湯式併行としておこう。粗製第3類はこのグループに伴出するのではないかと考えている。

第5群土器（精製第7類土器、粗製第4類土器）

精製第7類の平行帯縄文にS字状沈線文を加える文様は関東の加曾利Ⅰ式の影響を受けた地域の土器に用いられ、東北地方でも土着の土器と混血し、宮戸Ⅱa式（宝ヶ峰式）の名で広く知られている。宮戸Ⅱa式に比定しておこう。粗製第4類は宮戸Ⅱa式に伴う粗製土器とほぼ同じ特徴をもっている。

第6群土器（精製第8類土器、粗製第4類土器）

精製第8類の刻目帯と縦位、斜位の羽状縄文は、関東の加曾利Ⅱ式、東北の宮戸Ⅱb式（宝ヶ峰式）に広く用いられている。粗製第4類の羽状縄文も同じである。したがって宮戸Ⅱb式（宝ヶ峰式）に比定できる。

第7群土器（精製第9類土器、粗製第5類土器、粗製第6類土器）

精製第9類の帯状縄文に張瘤小突起を施す手法は、いわゆる新地式土器によくみられたもので、張瘤小突起のみをみれば西ノ浜式にも共通する。安孫子昭二氏の「コブ付土器」の第Ⅰ段階にみられる。粗製第5類、粗製第6類は新地式に伴うものと同じである。

第8群土器（精製第10類土器、粗製第6類土器、粗製第7類土器）

精製第10類の弧線連結文に張瘤小突起を施す手法は、宮戸Ⅲa式に、あるいは「コブ付土器の第Ⅱ段階」にみられる。粗製第6類土器、粗製第7類土器は出土状況からして伴出するものとして考えられるし、宮戸Ⅲa式にも伴っている。

第9群土器（精製第11類土器、精製第12類土器、粗製第6類土器、粗製第7類土器）

精製第11類の入組文化する弧線連結文に張瘤小突起を施す手法は第7群と第9群の中間的要素をもつもので、斎藤良治氏の陸前地方の編年の「第3類土器」、安孫子昭二氏の「コブ付土器の第Ⅲ段階」にみられる。精製第12類の連続刺突風の刻み目帯も同様である。粗製土器は出土状況からみて伴出するものとみられる。

第10群土器（精製第13類土器、精製第14類土器、粗製第6類土器、粗製第8類土器）

精製第13類の磨消縄文による入組文や精製第14類の櫛目（あるいは刷毛目）による入組文の結節に、他の部分には貼付されなくなりはじめた張瘤小突起を貼付したり、三叉状の陰刻を施したりしている手法は、金剛寺式や宮戸Ⅲb式にも顕著にみとめられ、「コブ付土器の第Ⅳ段階」

にみられる。粗製土器は出土状況からみて、伴出するものと考えられる。宮戸Ⅲb式でも同様の結果を得ているように思われる。

第11群土器（精製第15類土器、精製第16類土器、粗製第9類土器）

- ① 玉抱き三叉文、三叉状陰刻、魚眼状文などが磨消縄文とあわせて用いられる精製第15類は大洞B式に比定され、細分して大洞B₁式とよばれている土器である。
- ② いわゆる三叉文を施した精製第16類は大洞B式に比定され、細分して大洞B₂式とよばれている土器である。

第11群土器（精製第17類土器、粗製第9類土器）

いわゆるシグ状文を中心とする土器群で、大洞B-C式に比定される。

第13群土器（精製第18類土器、粗製第9類土器）

x字状文、大腿骨文などを中心とする土器で、大洞C式に比定される。

第14群土器（精製第19類土器、粗製第9類土器）

平行沈線文を主とする土器で大洞C₂式に比定される。

第15群土器（精製第20類土器、粗製第9類土器）

工字文を中心とする精製第19類は大洞A式に比定される。

第16群土器（精製第21類土器、粗製第9類土器）

変形工字文を中心とする土器は大洞A₁式に比定される。

以上のようにみてきた各群土器の編年上の位置をまとめて表にあらわせば次のようになる。

神矢田遺跡出土の土器				東 北 南 部			関 東	新 潟
群	精製分類	粗製分類	表採分類	①	②	③		
1	1 2	1	1	大木10	大木 10		+	池 津
?	?	?	?		(+)			
2	3	2	?		(+)	(袖窪)		
3	4	2	(2) 3	南 境	宮戸 I	(大湯)		堀之内 I
4	5 6	3	(4) 5					堀之内 II
5	7	4	6	宝ヶ峰	宮戸 II			加曾利 B I
6	8	4	?					加曾利 B II
?	?	?	?		(+)			加曾利 B III
7	9	5 6	?	新 地 金剛寺	西ノ浜	I		會 谷
8	10	6 7	7		宮戸Ⅲ a	II		安行 I
9	11 12	6 7	8		+	III		
10	13 14	6 8	9		宮戸Ⅲ b	IV		安行 II
11	15 16	9	10	B		B ₁ B ₂		安行Ⅲ a
12	17	9	11	B-C		B-C ₁ B-C ₂		姥山台
13	18	9	12	C ₁		C ₁		安行Ⅲ C
14	19	9	13	C ₂		C ₁		
15	20	9	14	A		A		千 網
16	21	9	15	A		A		荒 海

- 表註
- ①②③は後期の編年
 - ①は伊藤信雄1967「宮城県史1 古代」宮城県を参考にしてつくった。
 - ②は後藤勝彦1962「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」考古学雑誌第48巻1号および斎藤良治1967「陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について」『仙台湾周辺の考古学的研究』を参考にしてつくる。
 - ③はローマ数字のみ 安孫子昭二1969「東北地方における縄文後期後半の土器様式。」(石器時代第9号)より、4つの段階をとりだす。
 - 関東は1965『日本の考古学 II 縄文時代』よりとりだす。
 - 新潟は中村孝三郎1966『先史時代と長岡の遺跡』よりとりだす。

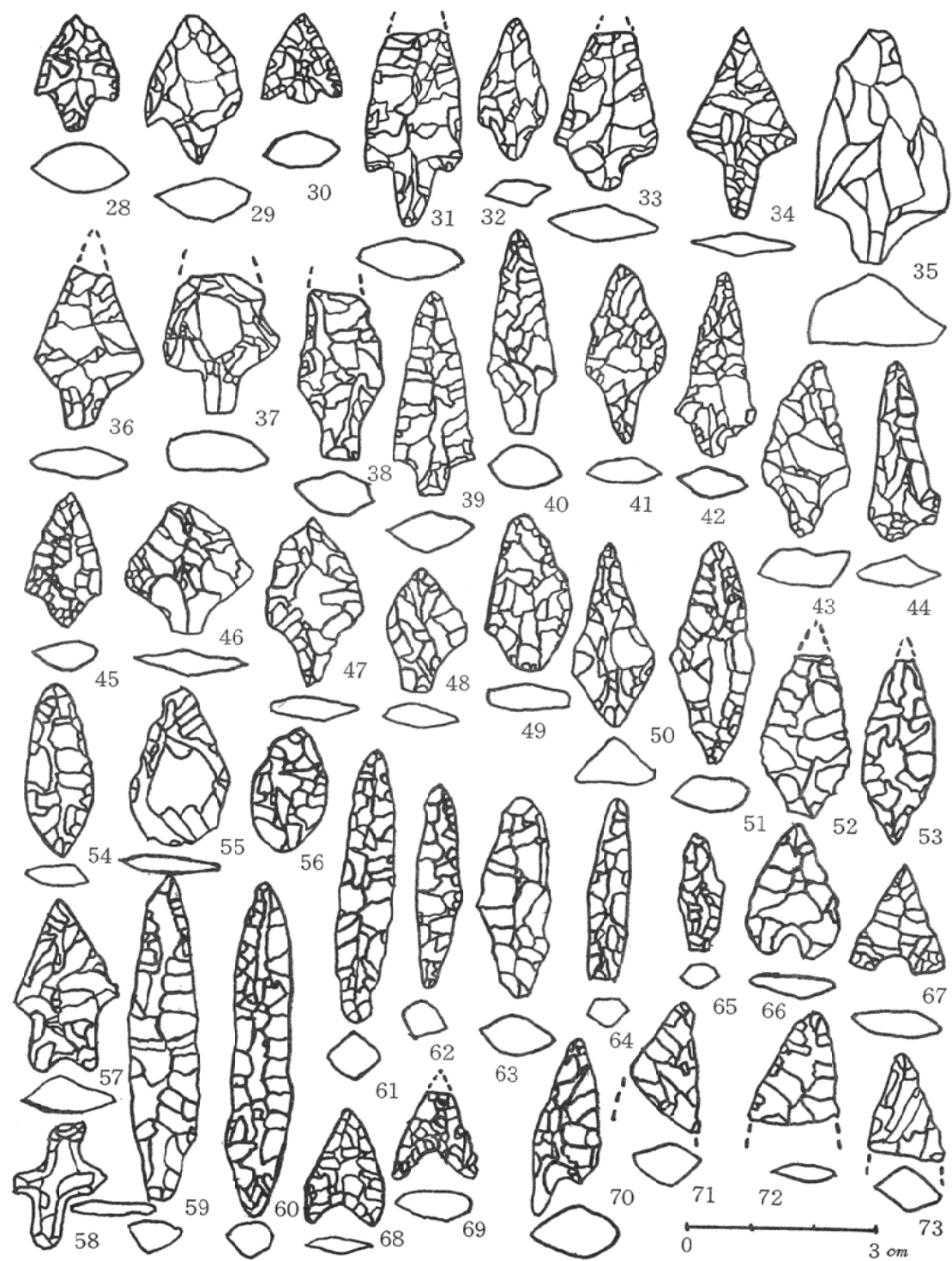
このように本遺跡出土の土器は編年上の位置をあたえられたのである。後期のほとんど各時期にわたる土器を採集できたことは、山形県、とくに庄内地方の後期縄文土器の編年研究に大変良好な資料を提供したといえる。しかし、今後に残された課題も少なくない。例えば、全体の不明確な土器の資料採集、土器と土器あるいは土器と石器等の共存関係の把握、土器の系統や地方色の把握などの問題である。第三次発掘ではこれらの問題を課題としてとりこんでみたい。

参考文献

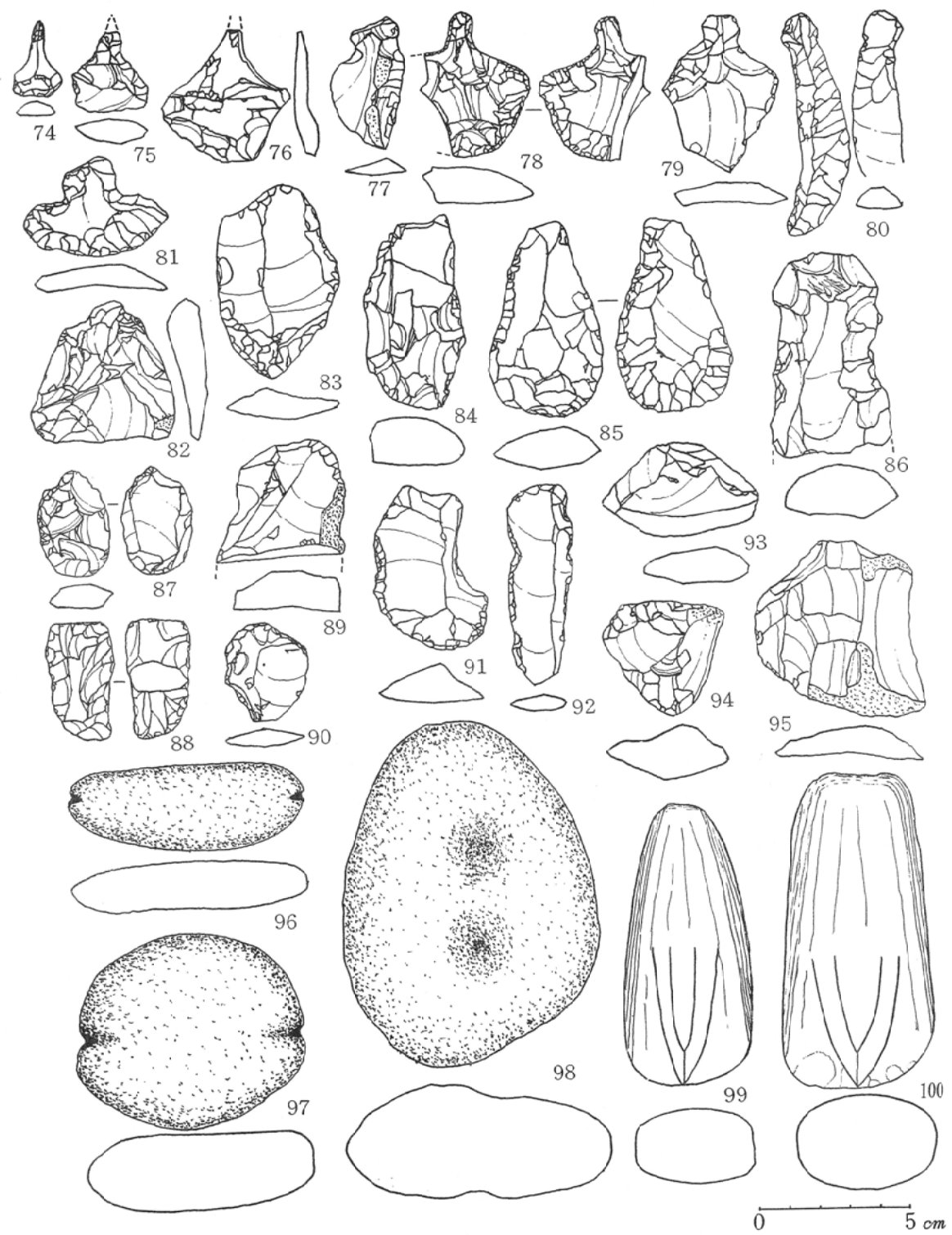
1. 関東の土器型式について
 - 岡本勇・戸沢充則「関東」『日本の考古学II 縄文時代』(昭40)
 - 『神明貝塚』庄和町文化財調査報告第2集(昭45)
2. 北陸、新潟の土器型式について
 - 高堀勝喜「北陸」『日本の考古学II 縄文時代』(昭40)
 - 中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館(昭41)
3. 大木10式について
 - 林謙作「東北」『日本の考古学II 縄文時代』(昭40)
 - 芳賀良光「宮城県宮戸島梨木園遺跡の研究」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史学研究会編(昭43)
4. 南境式、宝ヶ峰式、金剛寺式について
 - 伊東信雄「宮城県史1 古代」(昭42)
5. 宮戸諸型式について
 - 後藤勝彦「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」(考古学雑誌第48巻1号)(昭37)
 - 後藤勝彦「埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報—南境貝塚—」宮城県教育委員会刊(昭43)
 - 斎藤良治「陸前地方文化後期後半の土器編年について」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大歴史学研究会編(昭43)
- 横要照「陸前宮戸島に於ける縄文後期末遺物の研究」前掲書(昭43)
5. 安孫子昭二「谷定遺跡の深鉢とその編年の位置について」(庄内考古学第6号)(昭42)
- 安孫子昭二「東北地方における縄文後期後半の土器様式」(石器時代第9号)(昭44)
6. 晩期の土器について
 - 芹沢長介「石器時代の日本」築地書館(昭35)

石器 神矢田遺跡の2次にわたる調査によって、合計572点の石器が下表のように出土している。その種類は石鏃、石錐、石匕、石べら、打製石斧、円盤状石製品、不定形石器、磨製石斧、石錘、浮子石、石刀、石棒、凹石、磨石、石皿である。これらの石器は第1～5トレンチの第1層から第3層aにかけて出土したものであるが、第1層は攪乱されており、第2層、第3層aも河川の氾濫を受けており、伴出土器が不明確なものが多かった。したがって整然とした時期の断定ができずなお検討を要する点も多い。そこでここでは2次の調査で出土した石器を一括して紹介しておきたい。なお上記のほかに石核が17点、剥片が1千点余り出土している。そのほとんどは硬質頁岩である。石核は4cmから8cmの大きさで規則的な剥離技法は見られない。縦横無尽に各方向から剥離面が走り、使用に耐えない大きさにいたるまで石片を剥取している。石片も縦剥ぎ、横剥ぎなど多種多様であり不定形である。10cm以上の大きさのものは少ない。打製石器にもそうした大形のものは少ないことと関連している。

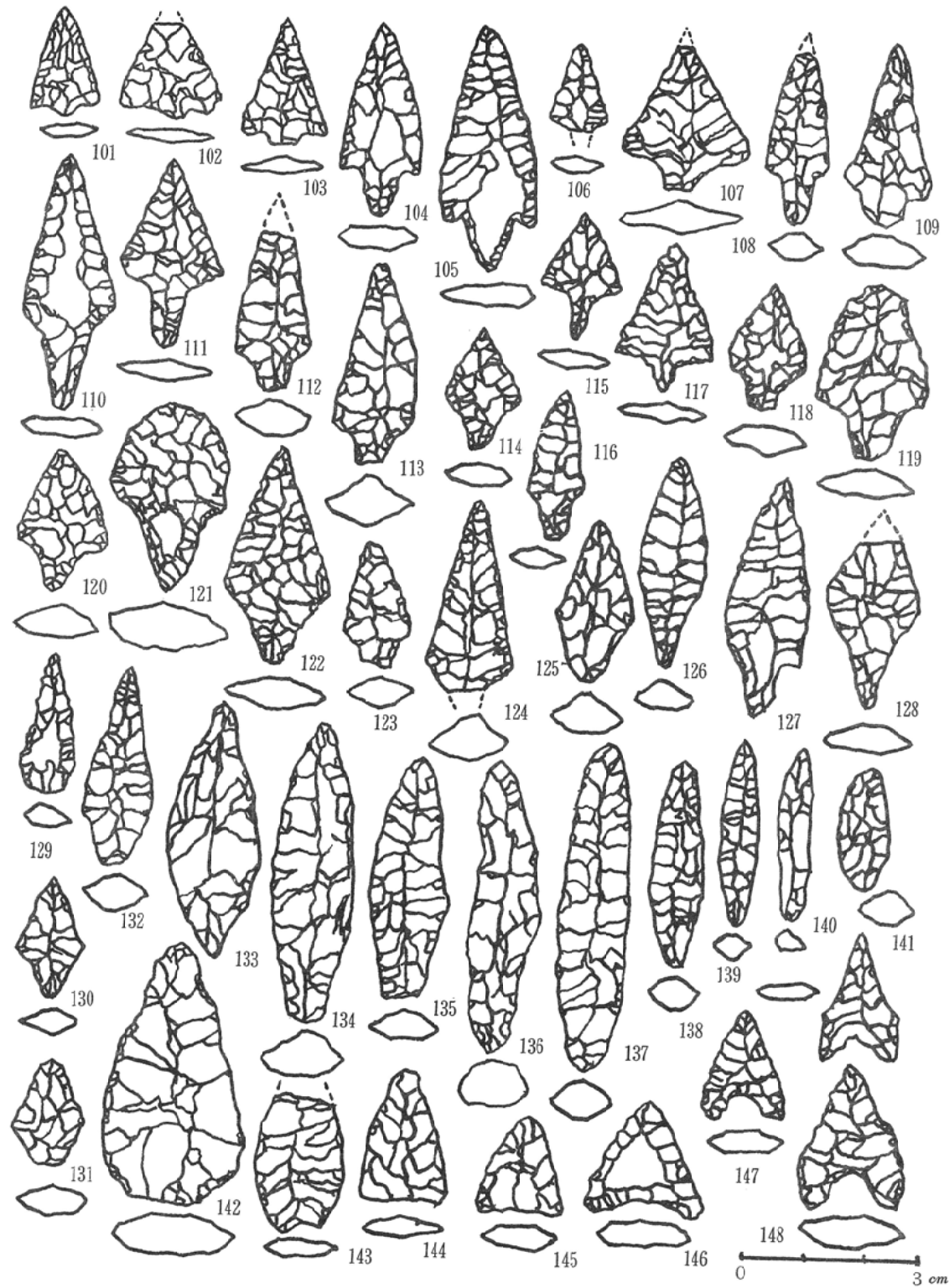
種別	類別	表面採集	第1次調査	第2次調査	合計
石 鏃	第1類	19	46	34	99
	第2類	8	7	17	32
	第3類	7	8	14	29
	第4類		7	14	21
	類型不明		12	3	15
	合計	34	80	82	196
石 錐		6	11	13	30
石 匕	第1類	2	2	9	13
	第2類			2	2
	第3類	1	2	5	8
	合計	3	4	16	23
石 べら		1	3	8	12
打製石斧			1	1	2
不定形石器		14	105	145	264
磨製石斧		12	21	13	46
石 錘		1	4	10	15
石 刀			1	2	3
石 棒			4	5	9
凹 石			12	17	29
円盤状石製品			1	3	4
浮 子 石				1	1
磨 石			5	2	7
石 皿			1	1	2
合 計		71	253	319	643



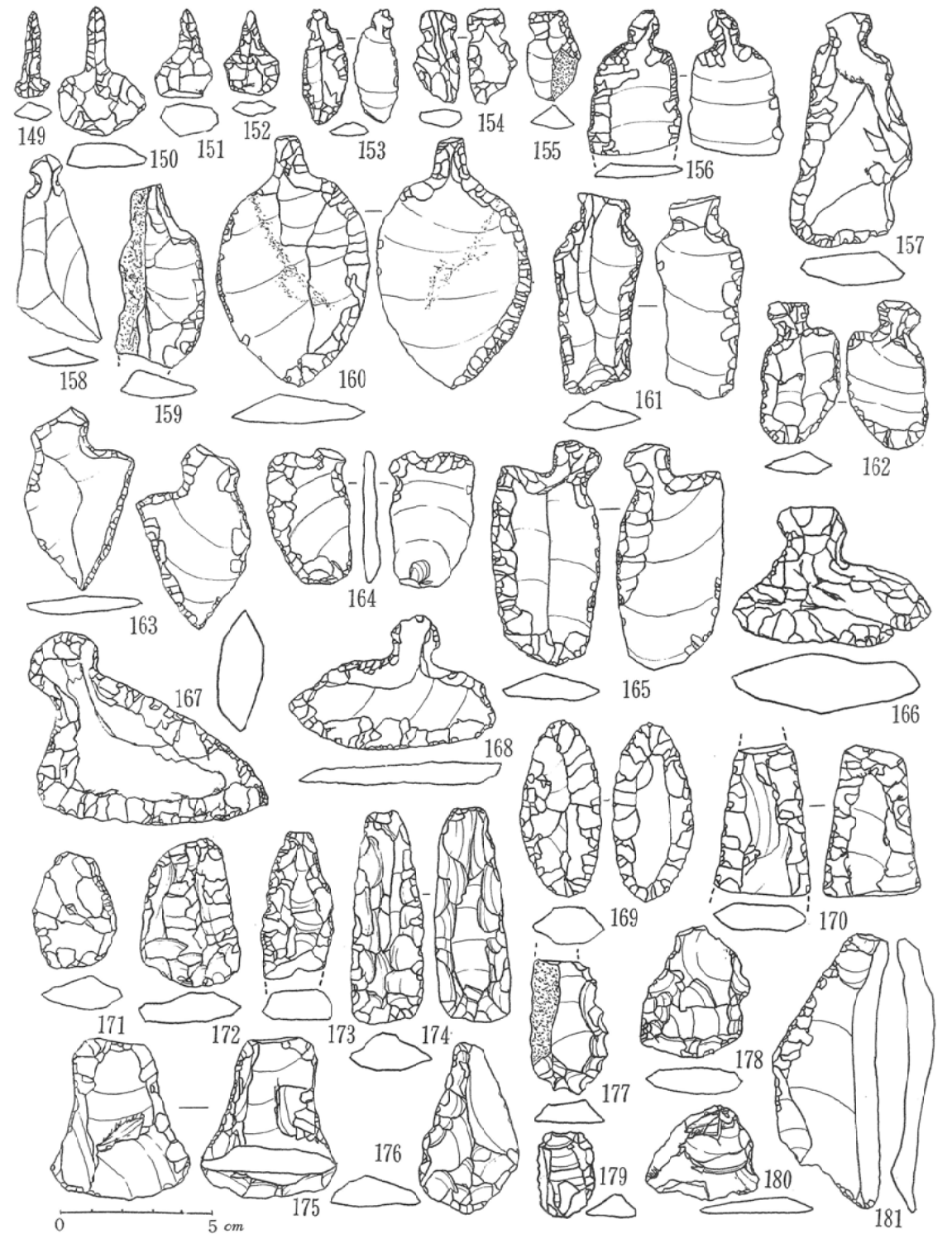
第15図 神矢田遺跡第1次調査で出土した石鏃



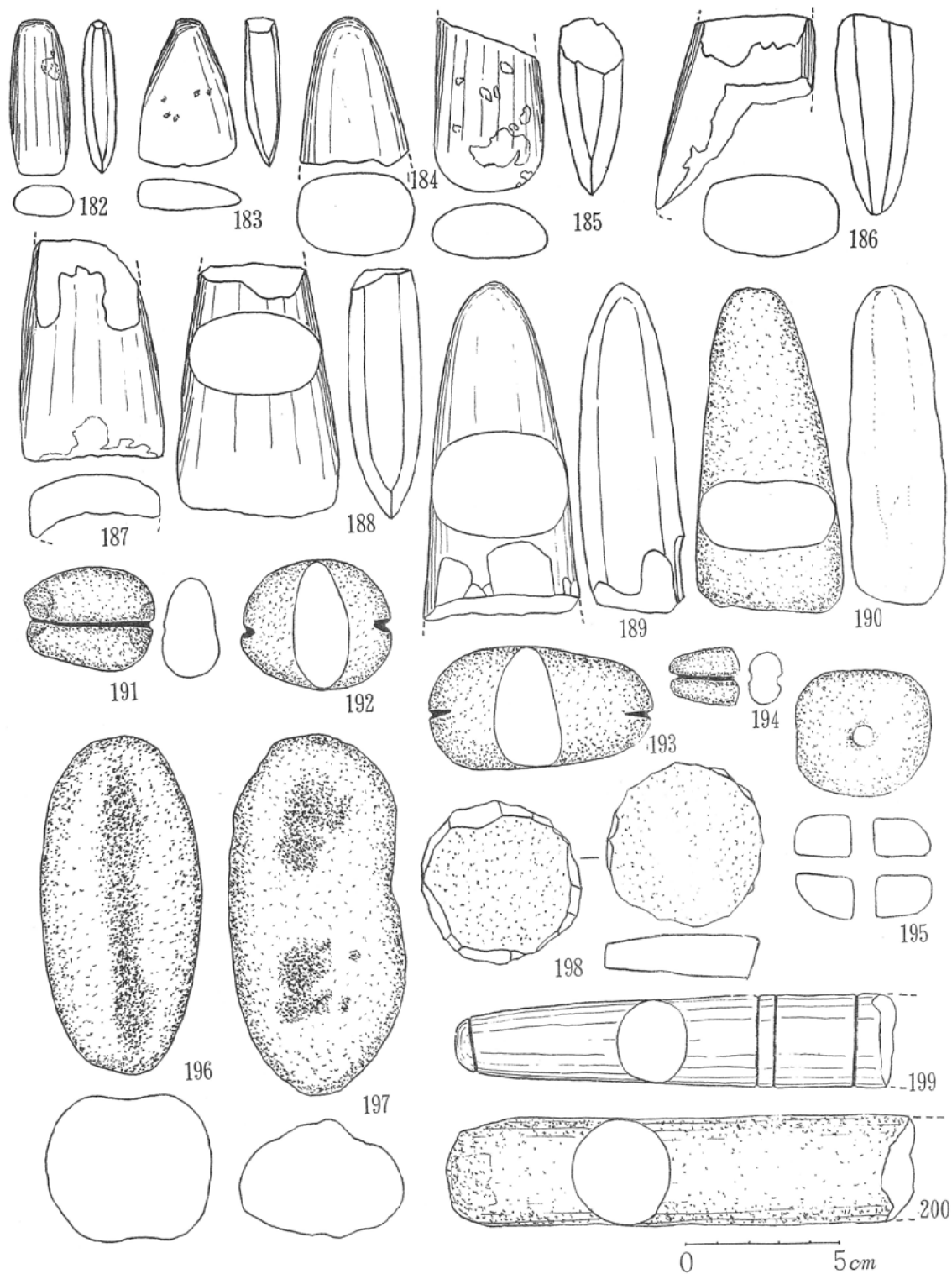
第16図 神矢田遺跡第1次調査で出土した石器



第17図 神矢田遺跡第2次調査で出土した石鏃



第18図 神矢田遺跡第2次調査で出土した石器



第19図 神矢田遺跡で出土した石器

石 鏃 (第15、17図) 石鏃は162点出土している。この点数は全石器の28%にあたり非常に多い。硬質頁岩が大半であるが、硅化の強い頁岩、石英岩、チャート、黒曜石などの製品もみられ、色彩もあざやかである。粗雑な未成品も含まれ、不定形石器の中にも石鏃の製作過程を示すものがある。この遺跡で製作されたことは確実である。形態も多種であり次の四つに類別される。

第1類 (28~48、101~121) 有茎の石鏃である。89点出土した。長さはいろいろあるが基部の肩の部分から基部を作出する際に、基部の上端から肩部にかけて内湾するもの、基部が肩部からくの字形になるものなどがある。

第2類 (49~56、122~133) 基部が基部の肩よりそのまま舌状に作出された石鏃である。24点出土している。全形が菱形を呈するもの、基部がまるく整形されるものなどがある。

第3類 (66~70、143~148) 無茎の石鏃である。22点出土している。基部は内湾しており、抉りの浅いものと深いものがある。基部から先端部にかけて一部内湾してくびれているものもある。

第4類 (59~65、134~141) 棒状で両端が尖るものである。21点出土している。断面が算盤玉のような形態に近い。石錐とも考えられるが、61、137のように下端近くに基部らしく作られたものもあり石鏃とした。

このほか先端部以外が欠損し類別できない石鏃が15点出土している。

石 錐 (第16図75、76、第18図 149~152) 石錐は24点出土している。不整形な剥片を利用してつまみの部分を楕円形に整形している。針部は0.5cm前後の太さで細長く整形している。すべて硬質頁岩製である。針部の途中で欠損するものも多くその部分だけの出土例もある。

石 ヒ (第16図77~82、第18図 153~168) 石ヒは20点出土している。つまみの作り方によって3つに類別できた。

第1類 (77~80、82、153~163) 縦形の石ヒである。11点出土している。つまみの方向と刃部が平行する石ヒであり、小形のもの、細長く先端が尖り、刃部が湾曲するもの、三味線の撥形をなすもの、木葉状のものなどがある。

第2類 (164、165) つまみが片寄り縦形とも横形ともつかないもので2点出土している。全形が長方形に近く整形され、その一隅につまみが作出されている。

第3類 (81、166~168) 横形の石ヒである。7点出土している。つまみの方向と刃部が垂直に交わるもので、刃部の一端が鋭く尖っているが、全形は扁平な楕円形に近い。

石べら (16図83~85、第18図 169~174、176) 石べらは11点出土している。ほとんど断面は凸レンズ形をなすもので、両面の全周辺に加工の施されているものが多い。全形が楕円形を呈するもの、紡錘形を呈するもの、両側辺が平行するものなどがある。

打製石斧 (第16図86、第18図 175) 打製石斧は2点出土しただけである。86は刃部を欠失しているが、やや大形のもので、175は小形である。いずれも両側辺の中央部にわずかに

びれがあり分銅形に近い。

不定形石器 (第16図87~95、第18図 177~ 181) 不定形石器は 250点出土している。第2次調査で得た石片は 762点であり、不定形石器はその16%にあたる。この中には他の石器の欠損した部分と考えられるようなもの、石鐮の製作過程にあるようなもの・搔器として考えられるようなものなどが含まれている。しかし大半は不定形な石片の一部に第二次加工が施されただけのものが多く、石器と呼ぶ機能は不十分なものも含まれている。硬質頁岩製がほとんどである。

円盤状石製品 (第19図 191) 円盤状石製品は 3点出土している。安山岩で作られており、直径 5cm前後、厚さは 1.5cm前後である。全周辺が荒く打ち欠かれて円盤状を呈している。同じ形態の土製品が 2点出土している。これは土器片をまるく磨り取ったものである。直径は 3cm前後である。いずれも用途は不明である。後期後半の土器に伴出している。

磨製石斧 (第16図 99、100、第18図 182~ 190) 磨製石斧は 34点出土している。182、183のような小形の製品もある。中、大形の石斧は断面が楕円形をなす乳棒状石斧と断面が隅丸の長方形をなす定角式石斧がある。ほとんどが欠損品で全形をとどめていないが、刃部の破損ははげしい。流紋岩、緑色凝灰岩、安山岩、花崗岩などが使われている。

石 錘 (第16図96、97、第18図 191~ 193) 石錘は 14点出土している。扁平な円形あるいは楕円形のは河原石の両端に溝をつくっている。191は全周辺に溝を彫り込んでいる。安山岩製が多く硬質頁岩製もある。このほか石錘が 1点出土している。第18図の 194で半欠した製品であるが、楕円形をなすもので長軸の方向に溝をめぐらせ、中央部に穴をあけて溝をつないでいる。

浮子石 (第19図 195) 浮子石は 1点の出土である。4.3cm× 4.1cmの正方形に近く、厚さは 3.4cmである。断面図のように十字に穴が貫通している。軽石の製品である。

石 刀 石刀は 3点出土しているが、すべて10cmに未たない破片で粘板岩で作られている。断面により石刀と考えられるもので、全形は不明である。

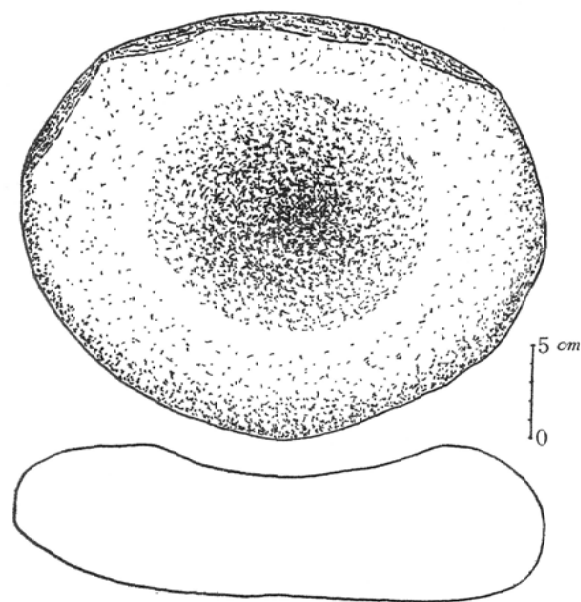
石 棒 (第19図 199、200) 石棒は 9点出土しているが、いずれも断片的な製品である。199は石棒の一端で先端部に一条、中央部に 3条の細い溝が作られている。粘板岩製と思われる。断面は楕円形をなしている。200はやや太い石棒で緑色凝灰岩製であり、特別な装飾は施されていない。

凹 石 (第16図98、第19図 196、197) 凹石は 29点出土している。拳大の自然石にくぼみのつけられた石器である。196は上、下面の太い溝がつけられているが、両側面に浅いくぼみがある。

磨 石 磨石は 7点出土している。凹石をやや小さくしたような河原石の一端に磨り取った面が形成されている石器である。

石 皿 (第20図) 石皿は 2点出土しており、図示したのは前述の第2号住居址の炉址の西側から出土したものである。扁平な楕円形の河原石で長軸が28.2cm、短軸が22.7cmある。図の上端は打ち欠いて加工した痕跡がある。中央部に直径15cmの円形にくぼみが作られている。

最深部で 1.8cmである。安山岩製で晩期後半のものである。



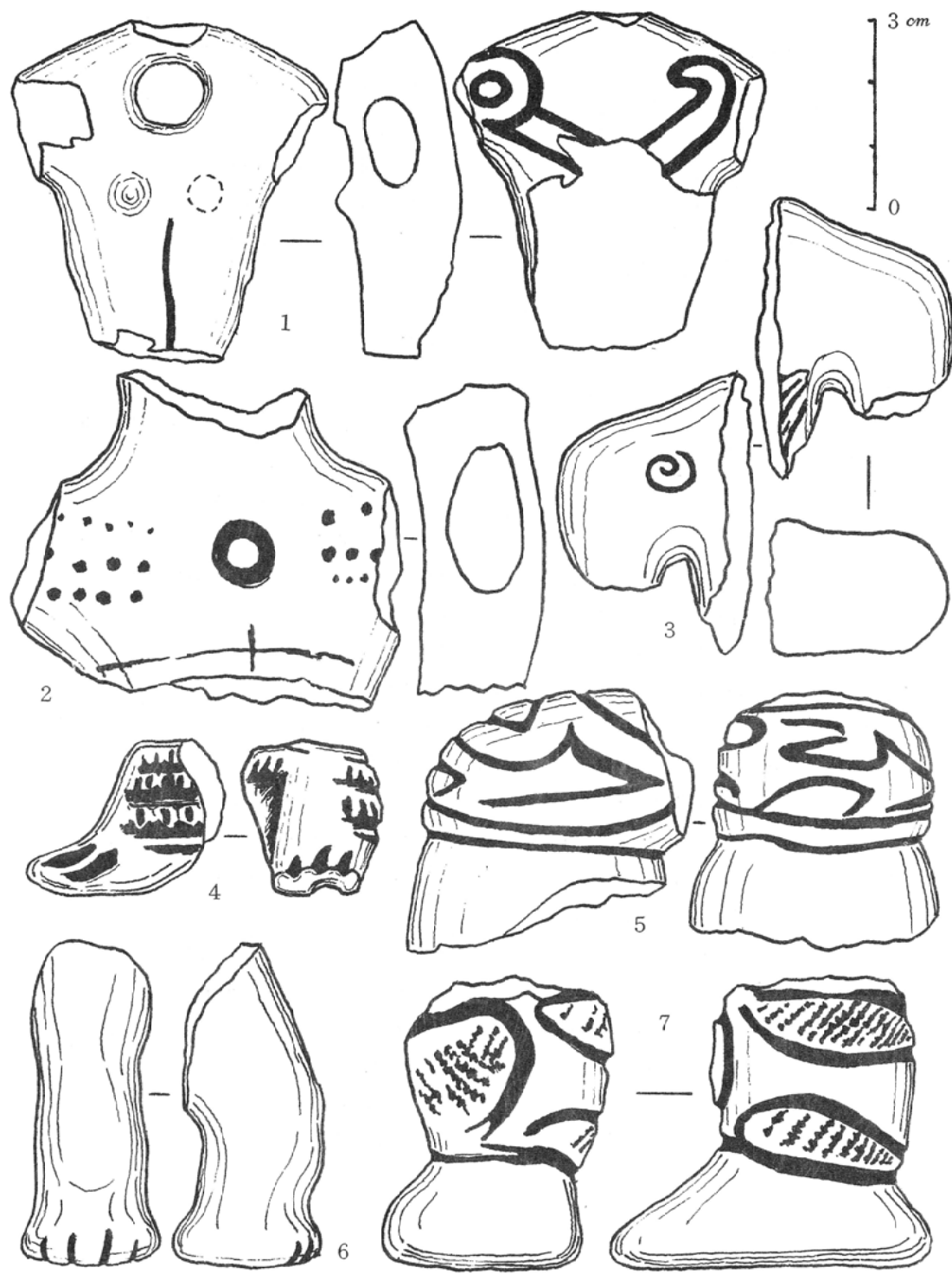
第20図 神矢田遺跡第1トレンチ
第2号住居址出土の石皿

第2号住居跡と第1号石組の間、第3層 a から出土したもので後期前半の時期と考えられる。2は板状土偶胸部で他は欠損している。正面中央に直径 1cmの円が沈線で施され、左右に 3列の列点文がある。胸部下の十字の沈線は意識的な文様ではないかもしれない。第1トレンチ第3層 a 上部から出土したものである。背面はほとんど無文でわずかに列点文が残っている。後期の土偶である。3は土偶の肩部で第2トレンチ第3層 a より出土したものである。左右どちらの肩部か不明であるが左図の中央に左巻きの渦文があり、右図の腋の下から数条の沈線文が施されている。4は遮光器土偶の手である。正面には肩部下に横に 3条の沈線が施され、縦に刻み目をつけられている。晩期末葉の所産と思われる。5は遮光器土偶の腰から大腿部で、複雑な沈線による浮文が施され、中は空洞である。腰の部分に脚部を接着したと思われる。第3層 a より第1トレンチで出土している。晩期初頭の所産と思われる。6は脚部で側面はやや弯曲し、断面は円形であり、足指は 5条の刻みで表現されている。第1トレンチ第2層の出土である。後期の所産であろうか。7は遮光器土偶の脚部の断片で沈線と縄文で文様つけられている。第1トレンチ第2層下部の出土である。扁平足の足が大きく作られ、晩期の所産であろうか。8は板状土偶の胸部の破片である。第1トレンチ第3層 a より出土したもので、正面には沈線による複雑怪奇な文様が描かれ、背面の肩部から胴部にかけてハケ目のような擦痕が走っている。後器前半の土器に伴出している。

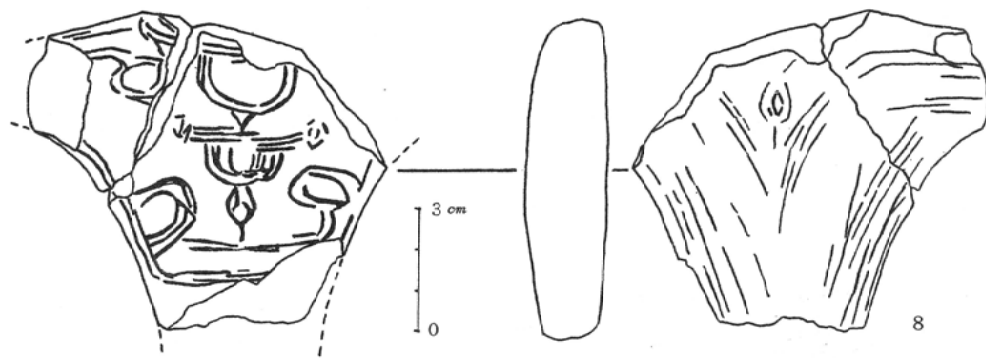
栓状耳飾 (第23図 1~ 3) 栓状耳飾は 3点出土している。そのうち 1点は表採である。いずれも土製品である。1は第1トレンチ第3層 a より出土したもので、直径は 3.3cm、周辺

その他の遺物 石器のほかにも興味深い遺物が出土している。土偶、栓状耳飾、スタンブ形土製品、有孔円柱形土製品、玉と垂飾品などである。ここでは発掘資料が大半であるがいくつかの表面採集資料も含めて紹介しておきたい。

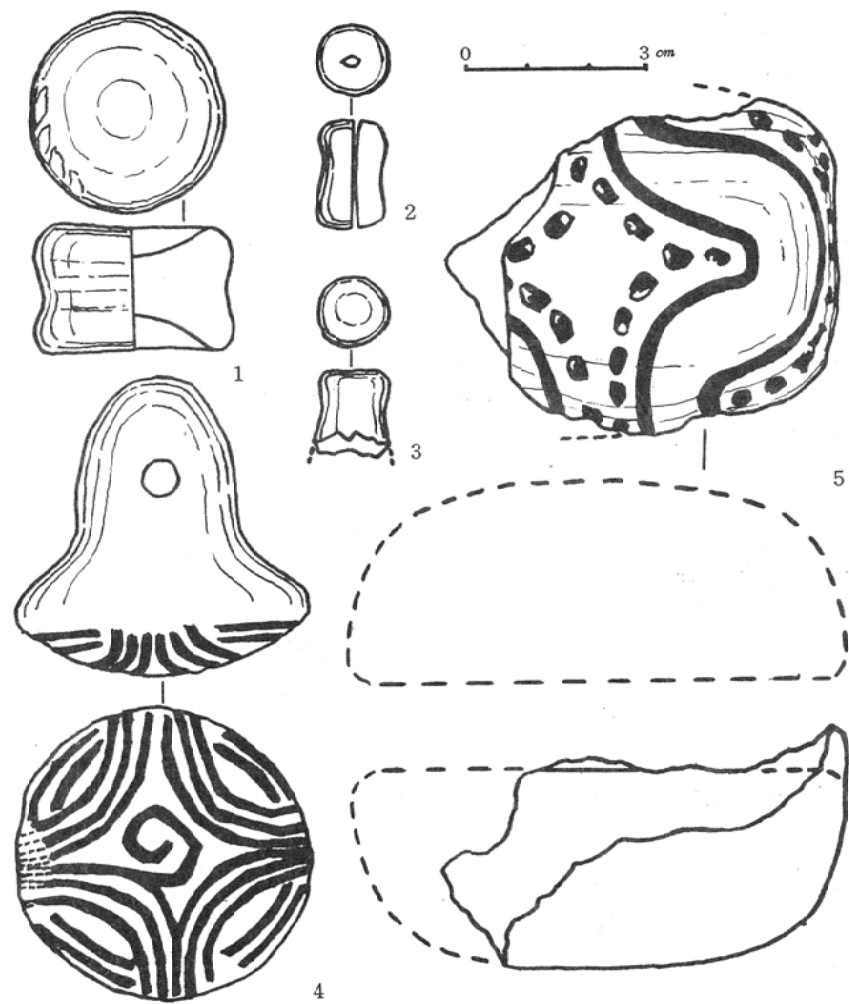
土 偶 (第21、22図) 土偶は 8点得ているが、すべて破損品で完形に近いものはない。4が表採資料で他は発掘資料である。1は頭と手足を欠損した板状土偶胸部で高さは 5.3cm、肩の幅は 5.0cm である。正面左の乳房がついているが、右は欠失している。その上に何かを貼りつけたと思われるボタン状の残痕がある。腹部の縦に一条の刻線があり、背面の背中から肩にかけて 2条の沈線と同心円、あるいは曲線の文様が施されている。第



第21図 神矢田遺跡出土の土偶(1)

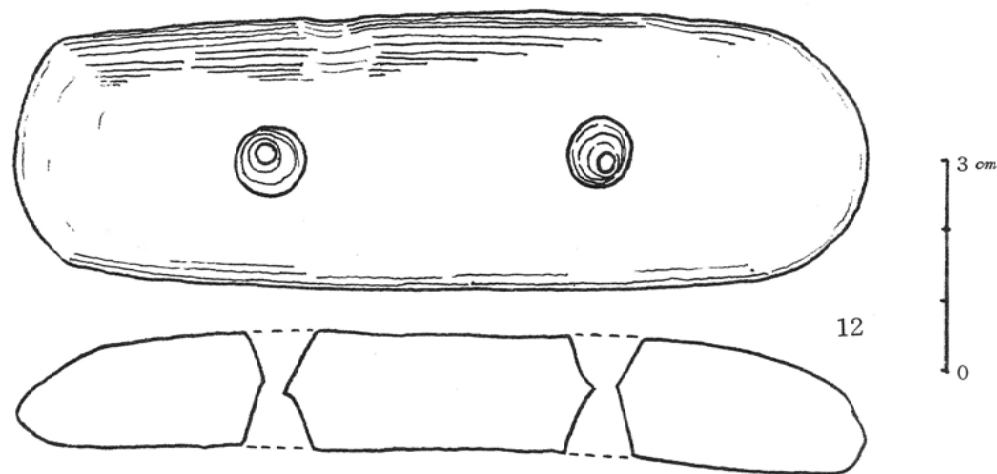
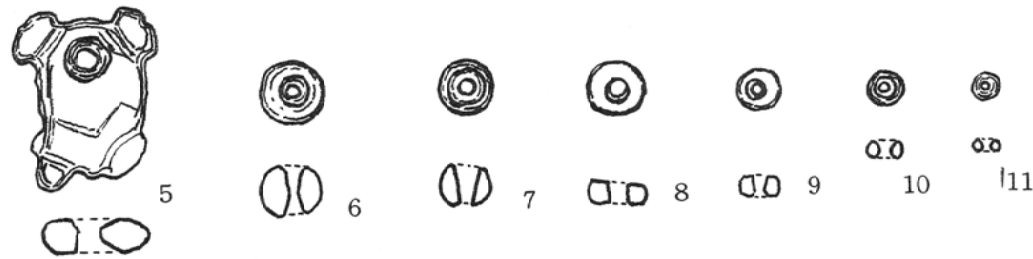
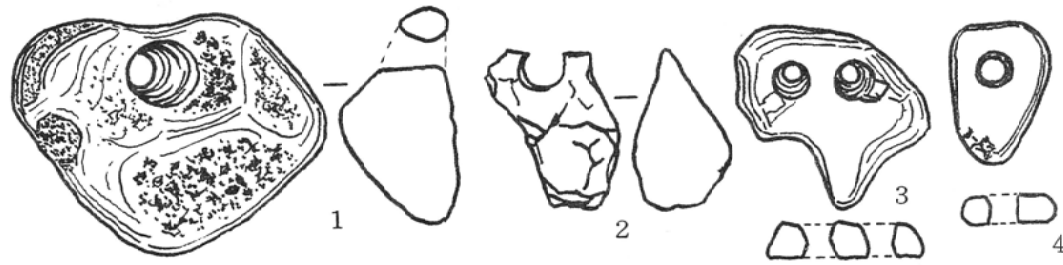


第22図 神矢田遺跡出土の土偶(2)



第23図 神矢田遺跡出土の土製品

の高さは 1.9cm である。上・下面がくぼみ側辺の断面はゆるやかに内弯する白形の耳飾りである。朱塗りの製品でわずかにその痕跡がある。2 は直径 1.2cm、高さ 1.8cm の製品で、白形をなし、小さな穴が貫通している。第 1 トレンチの第 3 層 a より出土した。3 は表採資料で 2 に類似しているが穴はない。欠損品である。



第24図 神矢田遺跡出土の石製装飾品

スタンプ形土製品 (第23図4) スタンプの形に似た土製品である。第 1 トレンチ第 3 層 a の上部より出土した。文様のある下端の直径は 4.8cm、つまみの部分の直径は 2.6cm で、全高は 4.9cm である。つまみの部分には直径 0.6cm の穴が貫通している。文様のある下面は球面をなしており、中央の左巻きの渦文を中心にして 3 条の円弧文が十文字状に施され、その間隙に 2 条の沈線文が施されている。左右対称的な図柄となっている。後期の所産と考えられる。

有孔円柱形土製品 (第23図5) 第 4 トレンチ第 3 層 a から出土したものである。全形の 3 分の 1 程の破片であるが、文様と弯曲から全形を推定すると直径 8cm、長さ 8.2cm の大きさで円柱状となり、直径 1.2cm の穴が貫通していたらしい。文様は側面に隅のまるい十字を二ヶ所区画し、中に刺突した文様をつけている。さらに端から側面にかけてやはり十字状の文様を組み合わせている。後期の製作と推定される。

玉と垂飾品 (第24図) 石製の装飾品は 12 点発見されている。このうち、8、11 は表採資料であり、他は第 3 層 a から発掘されたものである。6~11 は小玉あるいは丸玉と称するものである。6 は翡翠、7、8 は流紋岩、9~11 はやや軟質の緑色凝灰岩である。緑の美しい石材が選ばれている。1~5 は垂飾品であるが、1 は瑪瑙、2、4 は翡翠、3 は硬質頁岩、5 は緑色凝灰岩である。いずれも 1~2 個の穴が貫通している。2 は翡翠の破片に穴をあける作業中に欠損したものと考えられる。3 は裏面に無数の擦痕がある。5 は丹念な整形加工が施されている。2、6、7 は伴出土器により後期後半の製品と考えられるが、他は明白でなかった。12 は長さ 11.8cm、幅 3.8cm、厚さ 1.6cm で上下両面と側辺に擦り取った面が形成され、2 つの穴が両面から漏斗状の断面をもって穿孔されている。刃部は作られていない。そこで垂飾品と考えた。粘板岩の製品である。

以上のような遺物のほかに植物の種子、小さな骨の破片、朱塗りの顔料らしいものなどがわずかに発見されている。

VI 神矢田遺跡の概要と問題点

最後に神矢田遺跡発掘調査の結果を要約し、問題となる点を若干検討しておきたい。

1. 神矢田遺跡は山形県飽海郡遊佐町大字当山字北目にあり、標高 9 m を数える鳥海山南西山麓部に立地している。
2. 地層は地表面から 4 区分され、第 1 層は暗灰色腐植土層、第 2 層は茶褐色砂質土層、第 3 層 a は黒色腐植土層、第 3 層 b は黄色粘土層であった。第 3 層 a が遺物包含層で、他の地層から出土する遺物は二次的な推積と考えられる。
3. 炉址と石皿を伴う平地式住居跡が 2 ヶ所、炉址が 1 ヶ所、石組が 1 ヶ所発見された。いずれも縄文時代後期と晩期に所属するものである。
4. 土器は 16 群に類別された。縄文時代中期大木 10 式に併行するのが 1 群、後期袖窪式に併行

するのが1群、宮戸Ⅰ～Ⅲb式に併行するのが8群、晩期大洞形式に併行するのが6群とそれぞれ比定された。

5. 石器には石鏃、石錐、石匕、石べら、打製石斧、円盤状石製品、不定形石器、磨製石斧石錘、浮子石、石刀、石棒、凹石、磨石、石皿などが出土した。土製品としては土錘、円盤状土製品、土偶、栓状耳飾、スタンプ形土製品、有孔円柱形土製品などがあり、玉と垂飾品も発見された。そのほか植物の種子、骨の断片、朱の顔料などが検出され分析中である。

以上のような調査結果を明らかにすることができた。縄文時代中期最末葉から晩期終末期にいたるまで、極めて長期間にわたって神矢田遺跡に住みついた人類がいた。絶対年代にすればおそらく4千年を越えるような期間となろう。しかしその間平坦な文化の連続ではなかった。土器の数量が各形式の時期によって大きな差異がある。中期末葉、後期中葉、晩期前半期の土器片は比較的少なく、後期初頭、末葉、晩期末葉の土器片が多い。これは神矢田遺跡における文化の断続と盛衰を物語るものであろう。しかも地層に幾度かの高瀬川からの氾濫を受けた形跡があり、その都度遺跡は破壊された。遺物の包含層である第3層aもこの洗礼から免れることはできず、欠失し攪乱された状態にあった。これは遺構の調査を困難にただけではなくて、遺物の出土状態が混乱しており、伴出土器が不明確なために他の遺物の推定時期も判別しにくかったのである。だがこうした調査の中で新たな知見にのぼった収穫とそれらをめぐる問題も少くない。その2、3をとらえておきたい。

住居址が2ヶ所発見されたが、いずれも平地式住居址と考えられる。第1号住居址は後期末葉、第2号住居址は晩期後半期に所属するもので、どちらも内部に炉址と石皿を備えていた。県内で後期の住居址として検出された例は数少ない。高島町石ヶ森跡と鶴岡市谷定遺跡で発見されているが、比較検討していく必要がある。^(註1) ^(註2)

出土した土器片は実に膨大な量であった。復元可能な土器は少なく、細かな磨滅した土器片が多いのは河川のなせる業である。しかし縄文時代の後半を示す土器片が一連となって出土していることは注目されよう。特に後期は松島湾沿岸を中心に東北表日本では編年づけられているが、裏日本のそれはいまだ未開拓の分野に等しい。伴出関係にある土器片や土器以外の遺物に難点をもっているが、さらに分析、検討を加えてその変遷推移を明らかにしていきたい。^(註3)

石器の中で石鏃の出土例は極めて多く、多種であり、この地方では瞠目すべき様相を呈している。鶴岡市岡山遺跡では中期の土器とともに、無茎で抉りのある石鏃が多数発見されている。後期以後次第に有茎の石鏃に変化していったことが伺われる。またこれらの石鏃が実生活の中でどれほど利用されたものかは凝念がある。石鏃生産地としての供給源の機能があったのかもしれない。この変化の詳細を知ること今後の課題となろう。一方岡山で多出した石べらは衰退の途をたどっている。石匕もそうした傾向があり、両者とも岡山とは比べものにならないほど数量的にも、粗雑で薄く小形な製作技術的にも亡びゆく道具としての状態がある。翡翠の玉が出土しているが製作中の欠損品があって、神矢田遺跡で作られたことは確実である。原石の入手先が問題である。鳥海山東麓の升田附近から自然のガラス塊が発見されて、翡翠と思っ

とがあった。黒曜石の原石は月山西麓部の宝沢に出土している。翡翠の原石産出地は明らかでない。装飾品の作成にあたって他の石材も利用していることから、かなり限度のあったものと思われる。そのほか石錘、土錘が出土し漁撈の行われたことを示している。高瀬川には今でも無数の鮭が上流する。孵化施設もさることながらその量は裏日本随一という。標高9mという低地に居を構えていることと関わるのであろうか。またスタンプ形土製品は谷定など全国でも数える程の出土例しかない。その中でも逸品といえよう。有孔円柱形土製品も類例がない。三角柱状をしたものは中期の平田町新山遺跡、松山町相沢遺跡から出土している。新潟県、長野県などにもある。用途不明の土器であるがそれらとのつながりを考えることができよう。さらに今後の調査に期すべき点が多い。

- 註1 佐々木七郎、加藤稔「主要遺跡解説・縄文時代(後期)」『山形県史、考古資料 昭和44年3月』
- 註2 渡辺正機「鶴岡市谷定遺跡発掘調査概報」(庄内考古学7)昭和43年1月
- 註3 林謙作「東北」『日本の考古学II』昭和40年7月など
- 註4 佐々木七郎、「鶴岡市岡山遺跡」『柏倉亮吉教授環歴記念論文集』昭和41年1月など
- 註5 佐藤禎宏「新山遺跡調査概報」(庄内考古学3)昭和41年8月
- 註6 伊藤とし他「飽海郡松山町相沢遺跡予備調査報告」(漁火16)昭和41年3月

あ と が き

今回の小報は発掘調査の概略にとどめ、遺跡を簡潔に紹介するように申し合わせた。詳細な分析と論考は次回を期したのである。したがって説明も不備な点があり、理解できにくい点もあるかもしれない。神矢田遺跡の外郭をとらえていただければ幸いである。

「日本三代実録」には飽海郡神宮寺西浜で石鏃を出土した記事がある。この西浜が現在のどこにあたるのか深い謎となっているが、この神宮を大物忌神社と考えれば吹浦の西浜となる。神矢田の南を流れる高瀬川は下流で吹浦川と呼ばれ日本海に注ぎ込む。この河口はしばしば変化したことであろう。藤崎附近ではかつて石鏃が大量に採集され、時の藩主へ俵で贈呈したという。この石鏃は今も致道博物館に一部が保管されているが、その石鏃の形態、石質はほとんど神矢田に出土したものに類似している。偶然の一致であろうか。神矢田遺跡は幾度か高瀬川の猛威の洗礼を受けていた。今こうして神矢田を調査することに大きな感慨を覚える。

今回の調査にあたって遊佐町町長佐藤政雄氏、教育長菅原伝作氏をはじめ教育委員会のかたがたから大きな協力を得た。また土地関係者も緊急な調査をあたたかく理解してくれた。柏倉亮吉、加藤稔、川崎利夫、酒井忠一、長沢正機の各氏からは種々御教示をいただいた。山形大学生の名和達朗、酒井功、安彦政信の各君、酒田中央高校社会研究部員、遊佐高校の樋口トシ教諭と社会研究部員、遊佐町役場職員と同好のかたがたは発掘調査に貴重な労力を与えていただいた。深く感謝したい。本調査にもし得るところがあるとすれば上記の人々の御尽力の賜物である。なお未筆ながら2次にわたる発掘調査に参加していただいた人々の名簿を附記しておきたい。

(昭和46年3月9日脱稿)

神矢田遺跡発掘調査参加者名簿

調査員
調査補助員

柏倉亮吉（第一次）村上孝之助・佐藤禎宏・佐藤鎮雄
梅津恒夫・遠田実・阿部亮蔵・阿部幸治・佐藤富佐雄
木崎嘉太司・菅原洋一・小松昌一・樋口トシ・川崎利夫
（第2次）・名和達朗（第2次）・酒井功（第2次）・
安彦政信（第2次）梶原俊夫（第2次）・佐藤彦治（第
2次）村上良一（第2次）・高橋栄（第2次）・坂野大
鳳（第2次）・阿部文夫（第2次）・伊藤みき・齋藤粧
子・青山千明・池田アキコ・守屋圭子・深沢由美子・藤
原幸子・土井喜美子・渡辺和子（第1次）・鎌田浄子（第
2次）桜田ゆみ・伊藤みさ子・後藤真理子・住石りつ子
尾崎三保子・奥山恵子・齋藤孝子・清野寛子・長南敏子
相馬美和子・風間雅子・富樫陽子・長谷部広子・阿部弘
子・猪俣慶・菅原みわ・佐藤ゆき子・今野俊子・菅原麗
子・阿蘇則子・酒井忠一・長沢正機（敬称略）